

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
上島町	93	28	巳午 12月の巳の日	12月の巳の日に、新仏の家に餅や糸で作成したマリを供える。家の人は、祭壇に一重の餅を供える。午の日に、墓の左右に杭を打ち、一本の竹を渡す。竹にはお供えされたマリをつるして飾る。墓の花立には高野槇(松など)を立て、注連縄で結ぶ。注連縄は、たれが右から4本、2本、5本になるように高野槇に縛る。墓には一重の餅を供える。墓での供養が終わると、地区の寺に供えた餅を持って行く。家と墓に供えた餅を合わせて二重にして祭壇に供える。仏の行事なので、2つのお餅は同じ大きさである。〔詳細調査報告48参照〕	B
	93	11・18	初祈祷 1月3日 東泉寺	毎年新年に無病息災・五穀豊穡を祈る行事。祭壇に4mほどの竹を1本供え、その前で住職が経を唱える。それが終わると参拝者が木刀などをもち、竹を割る。竹の割れ方などにより、新年の運勢を占った。現在は、竹を割る占いは行っていない。	B
	93	1・18	とんど 1月14日か15日 神社・広場・海岸など	弓削島では、引野・下弓削・太田地区で1月15日の小正月、他の地域では14日に行われる。昔は、青年会がやぐらを組んで大がかりに行う地区があった。また、各戸で行うところもあった。久司浦・沢津・引野・明神・下弓削・狩尾では、子どもたちが家々から門松・注連縄・神社の古い札を集めてまわり、青年会が広場で竹のやぐらを組んだ。夜に浜に担ぎ降ろして火をつけ、燃え落ちる前に恵方の方向に向けて倒した。とんどの火で鏡餅を焼いて神棚に供え、焼きなおして食べたり、ぜんざいに入れるなどして食べる習わしがあり、この餅を食べることで無病息災でいられたい、とんどの煙を浴びると病気になるまいといわれた。とんどの灰を持ち帰って家の周囲に撒くことにより、害虫や蛇などの侵入除けや、火災除けのまじないにした。	B
	93	6・25	弓祈祷 1月15日 高浜八幡神社	前年のトウヤに当たった家が、近所の子どもと羽織袴のいでだちで、神社の境内に「鬼」または「鬼の目」に見立てた的と普通の的を置いて子どもに弓を射させて、鬼払いの祈祷を神主が行い、五穀豊穡を祈願した。昔は神主とトウヤと氏子総代と、元服を迎えた男子とで弓を射っていたが、現在は、参拝者は誰でも弓を射ることができる。	B
	93	29	弓削島四国 (お大師さん) 4月の第3日曜(3月21日) 島内の札所	弘法大師の命日である3月21日に弓削島四国が行われる(現在は4月第3日曜日)。島内にある四国八十八箇所になんだ各札所を巡礼する。巡礼者は島内の住人に限らず、尾道市など近隣からもやってくる。久司浦地区では、島四国当日の早朝に、大師講の4、5人が地区集会所に集まり、小豆の豆ごはんを炊いて150～200個ほどのおにぎりをつくり、1番札所がある東泉寺の大師堂でお茶やお菓子とともに巡礼者にお接待をしていた。品物は、地区の住民による寄付で賄い、なかには、お米や小豆を寄付する住民もいた。現在は高齢者が増え、おにぎりを作ることが難しくなったため、お茶とお菓子のお接待を行っている。上弓削地区では、願成寺、教員住宅前、福祉センター、個人宅などでお接待が行われる。願成寺では、ご飯とお漬物。福祉センターではお菓子などのお接待を行っている。沢津地区では弓削島四国八十八箇所霊場87番札所の長尾寺と、個人宅の2か所でお接待を行っている。昔はへぎめしなどのお接待をしていたが、現在はお菓子である。大谷地区では、豆ごはんや筍の煮物などをお接待している。材料の筍やまぶきは、お接待の1週間前に採りにいく。まぶきは豊島まで船で採りに行った。たけのこの煮物を作る前は、おでんでお接待していた。	B
	93	8	東泉寺薬師祭 (お薬師さん) 5月5日 東泉寺	毎年5月5日に久司浦地区にある東泉寺で行われるお祭り。東泉寺ではこの日を「鯨薬師」の日と定め、本尊である薬師如来の祭日にあわせて花祭(誕生会)の法要を行う。昭和時代頃は、旧弓削町内の禅宗系全寺院の住職によって行われたが、現在は東泉寺の住職のみによって行われている。東泉寺から海岸沿い道路までの参詣道には多くの露店が並んだ。最近では2、3の露店に留まる。寺では、甘茶やへぎ飯のお接待がある。町民だけでなく、尾道などの近隣からも参詣者がやって来る。	B
	93	29	行者講(行者さん) 5月・9月・10月 地区の各家庭	狩尾地区では5月・10月、久司浦地区では5月・9月に計年3回の行者講が行われていた。狩尾地区では、上狩尾(おかがりょう)と下狩尾(したがりょう)の家で、それぞれ交互にヤド(担当の家)が回ってくる。夜にヤドに寄り合い、祭壇に役行者の掛け軸をかけて、三宝に生米・イリコ・御神酒・果物などを供える。護摩を焚き、ほら貝を吹いて御祈祷し、直会に移る。	D
	93	8	宮籠り・山籠り (春籠り・秋籠り) 旧5月1日 山ノ神神社	狩尾地区では、旧暦の5月1日に山ノ神神社のお堂でお籠りを行った。春籠りとも呼ばれ、秋頃にも山籠りを行うなど、年に数回山籠りを行ったようである。各家庭から、お弁当を持ち寄って神社を参拝し、五穀豊穡を祈願した。その後、花見を楽しみ、子どもたちは境内で遊んだ。上弓削・久司浦・沢津の地区では、合同で高浜八幡神社で宮籠りを行った。それぞれでお弁当を持ち寄って、境内でミニ運動会のようなことをした。現在は行っておらず、いつ頃中断したかも不明である(昭和の中頃までか)。	D

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
上島町	93	19	新盆 8月13日 各地区	その年に亡くなった人がいる家が地区の広場に集まり盆踊りを踊る。踊りは炭鋸節や弓削踊りを踊った。大谷地区では、新盆に合わせて、麦わらで全長30cmほどの舟を作り、地区の海岸から海に流した。舟は、白い布で帆を作り、帆や舟に亡くなった方の戒名を記した。舟にそうめんや団子、仏に供えたご飯やブドウなどの果物を乗せた。昔は、舟を海に流した後はそのままだったが、そのうち回収してから燃やして供養するように変化した。海上で舟に乗って釣りをしていると、このような麦わら舟が流れているのを何度か見かけることがあったという。	D
	93	19	上弓削の盆行事 8月13日～15日 緑ヶ丘団地内にある公園	広場の中心に高さ2mほどのやぐらを組み、白い布で覆う。上には太鼓を置く。やぐらの前には祭壇を設置する。13日の新盆には、祭壇にその年に亡くなった方の位牌を置き、願成寺の住職が名前を読みあげ、供養を行う。参拝者は地藏盆踊りをおどる。14日は、広場に集まり、やぐらを囲んで炭鋸節や弓削踊りをおどる。15日は、戦没者の慰霊祭を行う。やぐらに戦没者の位牌を置き、願成寺の住職が名前を読み上げ、供養を行う。	B
	93	19	精霊流し(灯籠流し) 7月24日	上島町では上弓削地区のみで行っている行事である。7月24日の地藏盆の日に地藏施餓鬼をして、夕方に海岸に行き、灯籠流しを行う。灯籠流しの前には、会場に設置された祭壇で新盆の家が念仏を唱え、盆踊りなどが行われる。灯籠流しでは、藁を十文字にして、周りを紙で囲い、真ん中にローソクが立てられるようにつくった灯籠に願成寺で法名を書いてもらい、海岸の近くで法要をして精霊船に先立ちに流す。精霊船は、藁でつくり、凧を付けた帆を立てて、中に供物、きょう木、灯籠をのせた「極楽丸」である。現在は、舟や灯籠は木で制作され、流した後は環境に配慮してすぐに回収される。灯籠の制作については上弓削地区で行い、1つ300円で参加者に購入してもらい。集まったお金は、灯籠の半紙や墨の他、祭壇に供える果物やお菓子、花代、作業を行う人に配るお茶などの費用代となる。	B
	93	2・6	上弓削地区秋祭り 10月15日に最も近い土曜～月曜 (10月14日～16日) 高浜八幡神社	弓削島の久司浦地区・沢津地区・上弓削地区・狩尾地区(上狩尾(おかがりょう))によって行われる祭り。戦前は10月の14日・15日・16日の三日間で行われていたが、昭和20年頃から15日に最も近い土曜日・日曜日・月曜日で行われるようになった。上弓削6、久司浦3、沢津1の割合で当屋(頭屋)がまわる。この割合は人口の割合に相当しており、明治時代から続いていた(平成27年から久司浦地区が分離したため割合が上弓削9、沢津1になっている)。上弓削・久司浦・沢津の中から当屋の地区を決める。上弓削は8組からまんべんなく18名の当人をくじで決める「くじ取り式」を行い、沢津は4名、久司浦は6組を順番にまわり約15名の当人になる。当屋があたっていない地区の当人を「へそ当」と呼んでいる。当屋があつた地区は当人の中から当屋を決めて、亭主が決まる。当人の仕事は、神社および境内の掃除、御興、御旅用御道具の用意、注連縄作り、幕張り、幟立て、一連の式の準備等、各地区の当人が相談の上で行う。祭りでは、上弓削と久司浦のダンジリ(布団太鼓)がケンカを行う。当屋のダンジリが宮の正面に据わったら神事が開始する。久司浦地区の分離によりダンジリのケンカが行われなくなったが、上弓削地区では祭りを盛り上げるために、獅子舞を披露するようになった。	B
93	8	山ノ神社の祭り 10月7日 (10月6日～7日) 山ノ神社	狩尾地区にある山ノ神社で行われるお祭り。狩尾地区は、上狩尾(おかがりょう)と下狩尾(したがりょう)に分かれており、上狩尾が高浜八幡神社、下狩尾が弓削神社の氏子になっている。山ノ神社は狩尾地区の神社であり、地区全体が参加する。昔は10月6日に夜殿祭、7日に本祭りと、2日にわたって行われていた。現在は、10月7日のみ行う(今回調査を行った際は、10月6日の開催であった)。平成の末頃までは、高浜八幡神社と弓削神社の神主を迎えて神事を行っていた。しかし、弓削神社の神主が高齢となったため、高浜八幡神社の神主のみが神事を行うようになった。祭りの準備は当人(当屋番)が中心になって行う。祭り当日までに地区の住人により、下狩尾から神社までの道普請を行う。過去には上狩尾から神社へ続く道も道普請を行っていたが、現在はイノシシの被害などにより道が崩落して危険なため行わない。祭り当日には、神社境内や堂内の清掃、神主のお出迎えを行う。また、お米・ご飯・御神酒などを地区の委員の方々と協力して用意する。祭りでは、神主が太鼓を叩きながら祝詞を唱える。その間、参拝者は当人によって配られた、かわらけにつかれた御神酒、米、イロコを食する。祝詞が終わると祭りが終了する。	B	

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
上島町	93	29	大師講(西大師) 毎月21日 弓削島四国八十番札所のお堂	上弓削地区では、寺グループ、東グループ、西グループの3グループに分かれ、それぞれが巡礼者にお接待を行っていた。現在は西グループのみが、島四国80番札所国分寺があるお堂でお接待を行っている。西大師と呼ばれている。巡礼者の多くは上弓削地区からであるが、昔は下弓削や狩尾などの他地区からも参拝に来ており、一度で約50人、多い時で80人ほどが巡礼に来ていた。現在は、上弓削地区の人が20人ほど巡礼に来ている。巡礼者は、お堂にある地蔵を拜む。その後、ご飯やお茶のお接待を受けながら、接待者と近況を報告し合うなど交流を楽しむ。お接待を行う時間は朝6時から開始し、10時頃からお昼までには終了する。当番は、グループの2~3人が務める。狩尾地区では、弓削島四国第22番平等寺でお菓子のお接待を行っていた。上弓削地区と狩尾地区の間にある峠道(サヤントウゲ)を通して、上弓削地区から数人の巡礼者が参拝に来ていた。その巡礼者も、高齢化などにより訪れることがなくなったため、現在は中断している。	D
	93	19	高灯籠(ひやま) 7月29日~8月29日 新盆の家	新盆の家は、7月29日から8月29日の1か月間、庭などに「ひやま」と呼ばれる灯籠を飾る。灯籠には、戒名を書いた半紙を張る。新霊が家に帰ることができるよう、目印としてできるだけ高いヒノキやスギの木を立て、滑車を使って灯籠を上げる。晩には灯りを灯して奉り、夜間は降ろしておく。	A
	93	33	精霊棚 (しょうりょうだな・ そうりょうだな) 8月12日~16日 (8月12日~17日) 各戸	上弓削地区では、8月12日から16日のお盆の時期にかけて、各戸の玄関口などに精霊を迎えるための精霊棚を置く。新盆の家の精霊棚には、12段(閏年は13段)の梯子を棚に取り付ける。棚の大きさは各家それぞれであり、特に決まりは無い。8月12日の朝に棚を設置し、棚の内部に「三界万霊」と書かれた光明真言の札を立てる。13日にお供えのためのだんごを作り、素麺を茹で、砂糖菓子と花と共に札の前に供える。同じものを願成寺のお墓にも供える。14日には、お墓にお米とかぼちゃを供える。傷みやすいだんごや素麺は16日まで冷蔵庫で保管する。12日から14日にかけて、狩尾地区、沢津地区、上弓削地区から順に、願成寺の住職が精霊棚を置いている家を回って回る。16日の朝は、精霊棚に供えただんご、素麺、砂糖菓子を上弓削地区の海岸に持って行き、海へ流す。お墓に供えたものは、願成寺の焼却炉で燃やす。また、13日から17日にかけて、毎晩提灯を持ってお墓へ行き、提灯のローソクに火を灯し、火が消えるまで見守る。	B
	93	20	端午の節句 旧5月5日	大谷地区では、地区内の年長者が大谷集会所に集まって柏餅やちまきを作り、旧暦の5月5日に地区内に配る。だんご粉を練って餡を入れておだんごを作り、サルトリイバラの葉2枚で挟んで蒸して柏餅にする。ちまきは、三枚の葉(サルトリイバラ・クヌギ・ホオ)を使用しておだんごを巻き、笹で縛って茹でる。使用する葉は、地区の近隣のほか、大谷地区から遠く離れた鎌田地区などからも採集してくる。男子は、ちまきを食すと厄を払うといわれる。また、当日は風呂に菖蒲を浮かべて入浴する。そうすることで、疫病神を追い払うといわれた。お酒にも菖蒲を浮かべて飲むこともあった。	A
	94	2・8	引野・明神地区秋祭り 10月の日曜 (10月21日~22日) 箸神社	引野・明神地区秋祭りは、10月21日・22日と決まっていたが、相談の上で日程を決めるようになった。また、数年前より期間を1日(日曜日)とした。祭りの中心場所は箸神社である。箸神社の祭神は大山積命である。専属の宮司はおらず、弓削神社の末社となっている。引野を4班、明神を2班に分けて、6年に1度社家番が回ってくる。以前は、盛大に夜殿祭りに始まり、翌日は、奴、だんじり、神輿、道具持ち、神主、社家等が行列を作って御旅所まで行っていた。しかし、十数年前から子どもが少なくなり、奴も辞めた。今年からは、人手不足のため神輿やだんじりを出すのも辞め、略式の神事のみの実施となった。	B
	94	16	下弓削の雨乞い行事 旱魃のとき 弓削町雨乞い踊り保存会	田植え、芋植えがすみ、梅雨があけて1か月近く日照りが続くと芋の葉が巻いてきて、田にも1、2回水をまかなければいけない。こんな状態になり雨がほしいと雨乞いをした。雨乞い踊りは、盆供養の念仏踊りが起源となり室町時代から始めたと言われている。江戸時代になると盛んに催されており、明治・大正・昭和初期と引き継がれてきた。しかし、戦後は、雨乞いの行事そのものがすたれ、踊りも行われなくなっていた。弓削にしか無いこの踊りを復興し、後代に残していこうという気運が高まり、昭和46年(1971)に弓削町雨乞い踊り保存会が発足した。10年前ぐらいまでは、中学生の男女が運動会で披露していたが、現在は何かのイベントがあったときに披露している。	B

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
上島町	94	2・8	下弓削地区秋祭り 10月第3日曜ごろ	弓削神社の氏子である、太田・土生地区も入っている。4地区持ち回りにしていたが、昭和48年(1973)から2地区で「社家、だんじり番」「奴、神輿番」を担当する。道中は、奴が踏み(行列する)だんじりである。奴は、中学生の男女が二列になって行列する。最近では、中学生も少なくなったので、他地区(生名島)から応援に来てもらっている。奴は、化粧して奴特有の眉とヒゲを書く。一時期は奴を大人が行っていたが、前に進まずにじらして喧嘩になったこともあったので子どもに代わったという。道中、奴が進まない限りだんじりや神輿は進めないのである。宮座式の後、昭和49年(1974)から始まった小学校の奉納相撲も行われている。下弓削神社では、夜殿式、宮座式、湯立式を合わせた3つの神事をセットとしている。この夜殿式、宮座式の祭事は、県下では、佐島及び弓削島にのみ伝承されている。	B
	94	29	島四国 3月21日 ・4月21日に近い日曜	島内の各地にある寺院や路傍の石仏を札所と見立て、それを順番に参拝していく。その歴史は古いが、盛んになったのは文化・文政のころといわれている。弓削島は毎年4月の21日に近い日曜日、佐島は旧暦の3月21日と7月21日の2回行っていたが、十数年前から3月21日の1回のみ行っている。現在の巡礼ルートが確立したのは、昭和57年(1982)の「弓削町島四国調査委員会」の調査によるもので、両島に島四国霊場の札所案内板と道標が設置された。当日は、各札所に赤・青・白などいどりの札所幟が立ち並び、「お接待」と呼ばれるお菓子などが用意され、参拝者に振る舞われる。家族連れや友人同士のグループが途切れること無く巡ってくる。近島からの参拝者も多い。昔は、ほとんどの人が徒歩で巡っていたが、車や自転車で巡る人が多くなった。札所では、「へぎめし(木の皿に盛ったご飯)」やお茶も用意されていたが、だんだんと少なくなり、お菓子が多くなった。	A
	94	2・8	土生地区祭り (くんちまつり) 10月9日(旧9月9日) 来名戸神社	戦前は9月9日に行っていたので、「くんちまつり」と言われている。戦後は、新暦10月8日、9日に開催された。祭りは、くじ取り式、夜殿祭、おたち、おいり、宮座式の順で行われる。弓削神社の氏子でもあるので、同神主を迎える。奴、神輿、だんじり等は出ない。8日の夜に夜殿祭。9日に、おたち神事後、社家行列、宮においり後、宮座式をして終了する。中心地は土生地区にある来名戸神社である。地区住民は「おんだきさん」と呼び、主祭神は来名戸大神である。十数年前までは、衰退しがちな祭りを盛り返そうと、餅まきや出店なども行っていた。しかし、現在は日にちも9日の1日のみとなり、かなり縮小されている。	B
	94	19・23	庄右衛門供養 8月13日～15日 のうち1日 庄右衛門のお堂	藩主に直訴し斬首された庄右衛門を供養する。戦前は、8月14日の夜、土生地区の盆踊りの途中から庄右衛門堂に集まり庄右衛門の霊を慰めるための盆踊りを行っていた。終戦後はしばらく休止し、平成の前半から再び踊るようになった。7年前に、その世話を中心にやっていた婦人が亡くなり再度止まってしまった。	D
	94	19	下弓削地区の盆行事 8月13日～15日 弓削中央公民館の広場	盆の13日から15日にかけて、おどり場(広場)に地区の人が集まり、中央に檜を組み、太鼓を据え、その太鼓に合わせて輪になって踊る。音頭の口説き歌(通称「ヤートセエ」)はゆっくりした口調で、踊りの振りも単調で、同じ振りの繰り返しになる。口説き文句や踊りは、地区によって多少違うが、娯楽に乏しかった時代には楽しみの一つであった。他にも炭坑節や弓削音頭なども踊る。誰でも自由に、思い思いの服装で参加出来て、中には仮装した人も出る。仮装の順位をつけたり、競って賑わう。コロナ流行時は中止した。	B
	94	9	弓削神社大祭 10月第3日曜日頃 弓削神社	下弓削秋祭りと同じ日に行われる。午前中に、宮司、宮総代、頭屋、祭典委員、氏子によりお祓い・祝詞・御霊移しを行う。夕方より夜殿祭が行われ、祭りに参加する小学生・中学生は玉串奉奠、宮司によりお祓いを受ける。その後、奉納相撲大会が行われ幼児の泣き相撲大会や小学生学年別相撲大会が行われ、泣き相撲参加者、小学生の部で各学年優勝者、準優勝者は宮司より御幣をいただき、境内は見物客であふれた。コロナ流行時は神事のみ執り行われた。	B
	94	19	施餓鬼 8月10日頃 各寺	先祖をはじめ、亡くなった人々を供養するために集まる。7月24日の地藏盆の日、各寺に集まり新仏の供養のため「地藏施餓鬼」をする。先祖供養のための施餓鬼は各寺ごとに日を決めて集まる。下弓削地区では、7月24日「地藏施餓鬼」、8月10日「施餓鬼」、8月13日「神仏施餓鬼」として各寺にて供養が行われる。この行事は先祖はもとより、すべての生きとし生けるもの、無縁さまも供養の対象となり、三界万霊・有縁・無縁の霊を供養するとされている。昔からの言い伝えとして法事を忘れても施餓鬼を忘れてはならないと語り継がれるほど、施餓鬼はお盆の大事な行事である。コロナ流行時には、各寺で住職一人で供養を行った。	B

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
上島町	94	28	巳午(みいま) 12月初め 各家・寺	12月初の巳と午の日に行われるので、ミイマ(巳午)という。新仏のためのお正月なので、餅をつき、供え、念仏に来てくれた人には、アン餅を出す。一升餅といって、一升を一つ餅にして、重ねないで供える。親戚や近所からも餅や餅米が供えられる。お供えてくれた人、友人、知人にはお餅を切ってお返しをする。マリ、サル、フーセン、茶袋などの飾りを作るが、男の人が亡くなった家ではタバコ入れ、女の人にはニオイ袋や巾着を、竹につるして祭壇に飾る。墓には、松一對を立て、注連縄(左なえで四、二、三の足をつける)を張る。墓の後ろには故人を偲んで作られたマリなどのお飾りを供える。巳の日には住職が来て念仏を申し、次の午の日には墓経を行う。コロナ禍にあっては簡素化して行われた。	A
	95	6 ・ 25	弓祈祷 1月15日に近い日曜 佐島八幡神社	「鬼」または「鬼の目」に見立てた的をめがけて弓を射って鬼払いをし、五穀豊穡を祈願する神事。昔は、神主とトウヤと氏子総代と元服を迎えた男の子で弓を射っていたが、今は参拝に訪れた人は誰でも弓を射つことができる。	B
	95	2 ・ 6	佐島八幡神社の秋祭り 10月中旬の日曜(9月) 佐島八幡神社・佐島地区	トウヤの決め方は、今年の宮座式の後にくじ取り式をして、今年の当屋15軒を決める。佐島全戸のクジを作っておいて、なくなるまで毎年15軒ずつ決めていく。祭りが近くなったら、トウヤの中から「トウヤの宿」(本来のトウヤ)を決め、その中から亭主を選ぶ。佐島を5つの組に分けて、5年に一度神輿番(カイチョウ)が回ってくる。佐島の祭りには、夜殿式と宮座式の祭事があるが、県下では佐島、弓削島のみ伝承されるものである。夜殿式、宮座式、湯立式をセットとして神事としている。神輿が宮出しをしたら、大だんじり、小だんじりが出て担ぎ合う。軍歌や、はやり歌を歌いながら御旅所まで行き、神事後、宿へ落ち着く。〔詳細調査報告14参照〕	B
	96	18	生名の正月行事 1月1日～3日	元旦には除夜の鐘が鳴ったら海に行って清めの汐を汲んで(稲佐の浜の神事)八幡神社へお参りに行き、今年一年の家内安全、無病息災、豊作をお祈りする。	B
	96	6 ・ 25	的矢祭り (まとおまつり) 1月3日(1月12日) 生名八幡神社	準備は神職と宮総代と当屋の5～6名が的を4本立てて準備をして待つ。当日の弓矢を放つ順番は①神事②神職③宮総代④当屋⑤氏子の順で、氏子は年齢制限等の決まりはなく誰でも参加できた。的は直径1.5～2.0m程の大ききの円形で、中央に墨で黒い円を書いている。的矢祭の神事が終わると氏子が的を奪い合い、奪った的は分団のトンドに飾り付けた。トンドに「的矢」を飾り付けることは分団の誇りであった。現在はトウヤ制度はなく、地区の広報委員がその役をしている。かつてトウヤは新築した家が受け持つか地区の有志がしており、ある意味で名誉な事でもあった。神職と宮総代と地区の委員(当番制)が準備をし、神職、宮総代の後に参詣に訪れた氏子が的を射っている。矢を射る距離は神輿の倉庫から資料館の方向に30mぐらいである。昔は1月12日に行事を実施していたが平日だと人が集まらないとの理由で正月の3日に行うようになった。	B
	96	18	七草粥(七草雑炊) 1月7日	七草嚙子を喰いながら俎板の上で包丁、火箸とスリコギで七草を叩き雑炊にして、家内安全、無病息災を祈願して食べる。翌朝、寝坊すると風の神が風邪を引かすといって早起きをした。	B
	96	17 ・ 31	じいわ(地祝) 1月11日	「ご飯と酢の物」や「ご飯と鯛」を畑の神様に供え、年頭の挨拶をして鍬入れをする。農耕儀礼の一種であるが時代によって供え物の相違が見られる。	B
	96	1 ・ 18	トンド 1月中頃の土曜 (1月14日) 生名小学校	正月の神飾り、注連縄、門松等を各戸から集めてトンドに飾り付け、子どもの書いた書とか絵画を飾り「トンジャーシーメヤ」といって村中を練り歩いて、夕方に各地区の浜辺でトンドに火を付けて焼き、煙が天高く上るのを見て立身出世を祈願した。書いた書画が高く舞い上がると絵や書が上手になるとか、煙に当たると風邪を引かないとか言われた。残り火で餅を焼いて帰り、15日の朝にお粥を入れて神前に供え、家内安全を祈り、家族で食べる。また、焼いた後の灰を持ち帰り、家の周りに撒くと火難よけ、ムカデ等の虫よけになると信じられていた。成人の日が祝日になると、この日の前後に行われるようになった。昭和33年に一度中止されたが、昭和49年に有志が集まり復活させた。公民館活動として継続していたが、昭和55年から小学校の行事として受け継がれていった。この行事は中学3年生が主役であった。現在は村巡りはポイント、ポイントで実施し、旧中学校のグラウンドで火をつけて焼く。	B
	96	5	ときひ(とき日) 1月15日	大根なますを作ってご飯と豆腐をお墓に供えて墓参りをしていた。	D

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
上島町	96	2	船引神事(大日さん) 1月28日(3月28日)	本来は大日如来の御命日法要として3月28日にしていたが、生名は出稼ぎの島で1月中を正月休みとして2月1日には出稼ぎの船に乗って島を出て行くため、1月28日に行うようになった。神事は美しく飾り付けた曳舟を長襦袢姿の若者が南の地区(中の谷方面)や北地区(岡庄方面)から、船上の袈姿の長老(船頭)の指揮のもと、笛や太鼓でエイヤエイヤの掛け声とともに寺の入口(現在門柱の在る所)から稲荷神社の前を通って大日堂まで運んだ。いつの時代か百姓の伝馬船が出来た時には、同じようにして船を引き上げ神事を行い、終わった後には通常の作業船として使用していたとの話も残っている。本尊(大日如来像)の御開帳が33年に一度(25年など諸説あり)営まれて、近隣の人々もお参りし大変賑やかだったという。大日堂は寛文9年(1669)の建立で昭和49年(1974)に有志の人たちの寄付によって再建された。昭和の終わり頃までは「大日堂」や同じ敷地にある「聖さん」は御詠歌の人や岡庄地区の人によって掃除等をしてしていたが、今は訪れる人もなくだんだんと廃墟への道を辿っている。	D
	96	18	ひてえ正月(送り正月) 旧2月1日	ひてえ正月は旧暦の2月1日に行われる正月でこの日だけ祝う。仕事は休む。ひてえ正月は「1日正月」が「ひと月正月」→「ひひて正月」→「ひとえ正月」→「ひてえ正月」と変化していったものと思われる。別名「送り正月」と呼ばれるようにこの日以降、出船、出稼ぎが始まる。	D
	96	エ	初午 2月初めての午の日	正福寺横と八幡神社の井戸の上の2ヶ所に稲荷神社が祀られている。稲荷神のお祀りには五穀豊穡、商売繁盛、家内安全を祈願して行われたもので、起源は和銅4年(711)2月の初午の日に稲荷大神が稲荷山に鎮座した日とする。稲荷神社の赤い鳥居には建設業者や商売人の名前が残っている。現在は、商売人関係の人のみお参りする。	B
	96	15	節分(豆まき) 2月3日	節分の日には、日暮れに神社・寺に豆まきに行き、家では鯛の頭を糞の木(ヒイラギ)に串刺して門先に立てて「鬼は外、福は内」と三回主人が言いながら豆まきをする。豆をまく時にバベ(ウバメガシ)の青葉を竈で燃やしてバリバリと音を出して氣勢を上げる。その後、年の数だけ豆を食べて一年の平穏無事を祈る。門先にはケントを吊るして鬼が入らないようにして外には出なかった。また、この日に戸外で子猫や子犬を拾って懐に入れて帰ると小判に化けるとの話もある。厄年の人は夜中に人目につかないように十字路に白い紙でお金と豆を包んで十字路の真ん中程に置いて厄を捨てて帰った。これは見つけても拾ってはならないといわれていた。	B
	96	エ	にはんさん 旧2月15日 法蓮寺(光明坊)	旧暦の2月15日は「にはんさん」と言って、生口島の寺にある法蓮寺(光明坊)へ新仏のある家は小舟を出し、村人は詣でることとなっていた。「にはんさん」は、「涅槃さん」がなまったものといわれる。	B
	96	20	雛節句(桃の節句) 3月3日	節句には五色の菱餅、あられ、寿司、貝汁を供える。初雛の家は三色の餅を配った。雛段に飾る餅は餅をキビ、栗、蓬(よもぎ)、紅、白の五色にした菱餅を供える。現在は蓬、紅、白の三色餅を供えている。貝汁は昔はズーズー貝で出汁を取っていた。また、この日(旧3月3日)は磯遊び(磯開き)で、嫁の骨休みとか嫁の泣き潮(潮が退かないと貝が取れない、取れないと姑に叱られる)と呼ばれたが、女性の骨休み日であった。	B
	96	12	立石山の観音さんまつり 旧3月18日 立石山	立石山中腹の天然の岩窟にある子安観音石像は、天保年間に当時の篤志家により立像されたもので、靈験は妊婦・乳幼児の安産、成長などの願いに効果があるものとして、多くの人々が参詣した。明治維新後になると、参詣する人もまばらとなったが、因島の実業家である麻生以登(麻生イト)によって、大正14年に中腹までの山道の工事や、山麓の庭園の造営などによって再び蘇った。「30日秘仏」の内の18日の秘仏は「観世音菩薩」が当てられ、観世音菩薩と娑婆との間に縁ありとなり、縁日(18日)が設定された。この日に仏を供養する義が観音さんの祭りとして変化していった。当日は芝居小屋が立ったり、出店が出たりと大変賑わっていた。祭りそのものを「観音さんの市」とも呼ばれていた。観音堂にお参りすると、煎餅・あられ・そらず(空豆)・ボン菓子のお接待を受ける。子どもにとっては楽しい1日であり、お小遣い(50円ほど)を持って出掛けた。	B
96	29	島四国遍路(お遍路さん) ・お大師講 旧3月21日 生名島全島	3月21日(旧暦)は、お大師さん(八十八札所のお遍路)で正福寺の1番から大日堂の88番まで仏様を訪ねて廻っていく。昼頃に48番札所の八坂寺に着き、堂内に祀られている仏様と共に昼食の接待を受ける。お接待を断ると「罰(バチ)」が当たると言われていた。お接待は個人ですることもあれば、地区ですることもあり、昔はアラレ、金柑、炒りそら豆、おにぎり、赤飯、お菓子類を各番の札所で巡拝者に配っていた。島八十八札所の石仏は昭和8年に世話人によって設置された。	B	

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
上島町	96	ウ	お釈迦様の花祭り 4月8日 生名正福寺	正福寺ではお釈迦様の誕生を記念し、仏像が出され、竿の先に各種の花を括り付け高く立てる。また、お堂を花で飾り、仏像に甘茶をかけながら「南無阿弥陀仏」「南釈迦牟尼仏」と唱えながら家内安全を祈る。その後、甘茶を貰って家に帰り、これを飲む。甘茶を飲むと夏病しないと言われていた。本堂では地獄、極楽の絵が飾られて、悪事をする者は地獄へ、善行する者は極楽へ行くとの有難い教えの説法があり、子どもたちはそれを聞いて恐れていた。地域の子どもの勸善懲悪の教育の一環であった。この日は「卯月八日」と言って、蚊帳を出す日でもあった。	B
	96	20	端午の節句 5月5日	端午の節句は男の子の祭りで、男子が生まれた家では近親、知人等から鯉幟等が祝として贈られ、多くの鯉幟を立てるのを誇りとして喜びを祝った。菖蒲にセンダン、蓮等を束ねて魔除けとし、軒先に刺した。里の親から座敷幟、鎧甲、武者人形等が贈られ、これらを座敷に飾る。張り子の虎は魔除けとされた。初節句の家は無花果の葉、しばの葉、笹の葉、さいもり葉等で包んだ大きなあんこ入りの粽や柏餅を作って配り、お客さんを招いて子どもを中心とした宴を開いた。	B
	96	29	石鍾山山開き 7月	7月になると石鍾山の山開きがあり、信仰者は先達連れられて白装束、法螺貝、太鼓、船には幟を立てて出発していった。山から帰ると住民は浜辺で迎え、うつ伏せになり、その上を山に行った人は一人一人の背を跨いでご加護を与え、無病息災、石鍾神社のご祈禱を授けた。石鍾のお土産は「ニッケ、御札、シャクナゲの葉、すもも、医薬のダラスケ」であった。シャクナゲの葉に御札を竹に挟んで畑に立てると作物の出来が良いと言われていた。かつては石鍾講もあったという。	B
	96	エ	6月ひてえ 旧6月1日	6月ひてえは6月1日のことを言う。こおら餅と炒ったそら豆を神様に供えて食べる。この行事を「歯固め」とも言った。	D
	96	ウ	祇園さん 6月14日	きゅうりを輪切りにした断面が神紋に似ていることから、この日はきゅうりを食べなかった。	D
	96	35	管弦祭 (宮島さん・十七夜) 旧6月17日	広島県の厳島神社の管弦祭と同じ日に行われた。生名島にも厳島神社があり祀られている。当日は沖に船を出し、子どもたちは各部落毎に麦わらを集め、海岸に持ち寄り、それを燃やした。また、この日は「十七夜」といって、子どもたちは火を焚きながら泳ぎ回った。近年、宮島さんの日には花火が打上げられるようになった。現在は船を出し、海岸で麦・藁を燃やすことは絶えてしまっているが、花火の打ち上げは続いており、町民の中では管弦祭ではなく単なる花火祭りとして残っている。	B
	96	15・23	蚊帳待ち(和霊さん) 旧6月24日	この日の夜は蚊帳に入らずに外で蚊を追いながら辛抱すればあらゆる難も逃れ、願いは叶うと言われ、夜遅くまで蚊帳に入らずに辛抱した。これは、宇和島藩の家老山家清兵衛が蚊帳の中で殺されて来島海峡に沈められたのを慰めるため、和霊神社に祀った日に因む。また、蚊帳を出す日は指の立つ日(指折り数えると1~5は折り、6~10は立てる)が良いとされていた。	D
	96	エ	七夕さん 7月7日	五色の短冊で飾った笹と西瓜、白瓜などを海に流した。当日、子どもたちは七度泳いで七度飯を食うという行事も行われた。また、そうめんを織姫が紡ぐ糸に見立てて、織姫にあやかって裁縫の上達を祈る星祭りとしていた。現在は笹を形だけ海に流して回収する。	B
	96	17	井戸替え 旧7月7日	井戸の中を空にして掃除し、新しい水の湧水を祝った。昔は地域ごとに村井戸(共同井戸)があり、夏の疫病を防ぐ目的もあって、この時季に地域の人々が総出で「井戸替え＝井戸浚え」を行った。上水道の整備に伴い行われなくなった。	D
	96	ウ	牛の海洗い 旧7月8日	牛を海に連れて行って洗う日。この日は牛の糞を「エンコ」が拾いに来るといって、子どもは海で泳ぐことを禁じられていた。また、この日は「きゅうり」を食べてはいけないといわれていた。きゅうりの切口が祇園さんの神紋に似ているためという。昔は農耕牛として牛を飼う家が多かったが、現在は牛を飼う家がなくなり、この行事は行われていない。	D
96	16	雨乞い行事 真夏の雨が10日以上 降らないとき	麦わら等で龍の形をした物を作り、神仏に祈願して妙見山に運び、火を焚いて雨の降るのを祈願して待った。	D	

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
上島町	96	19	生名の盆行事 旧7月13日～15日 旧中学校グラウンド	新盆(あらぼん)の家では、木を十文字に組んだのを門先に立ててその木の3か所の先に笹を束ねたものを縛り付け、縦の木に精霊棚を付け、棚にはキュウリの馬、茄子の牛、水、仏花、素麺、ご飯、塩、線香立て、ローソク立て等を置き、縦の木に戒名を書いたものを貼り付ける。提灯は精霊棚の下にぶら下げる。この十文字の設備を「エッサッサ」という。作る料理は、シイナのおひたし、アカザ・シロザ、迎え団子、迎えソーメン、寿司、蓮の葉、米、取り付け団子、塩であり、特にソーメンにシイナの葉がなかったらご馳走がないと言って孫をグドに突っ込まれるとか、シイナを食べないと仏さんが帰れないと言われた。家の門先では迎え火を焚いて、死者に家の場所を教える。また、新盆の家では音頭口説きの者を雇い、踊り供養をし、次々と新仏の家へ行って踊った。生名の盆踊りの口説き文句は一節毎に「エンヤーアトセー、エンヤーアトセー」と「ソリャセードッコイセー」の囃子文句で相槌を打ち、後ずさりしながらソーメン箱を擽がけて背負って踊った。箱の中は戒名を書いた紙を張り付けたローソク立を入れる。踊りは「ハンジキ踊り」といって、後に下がりがながら踊ることから言われている。ハンジキとは、シャコ的一种である。旧暦の7月17日は観音さんで、旧暦の7月18日は地藏盆と云って地藏堂の前でも盆踊りが行われた。かつて盆踊りは各家庭の庭先で行われていたが、校庭など広い場所で行われるようになっていく。	B
	96	19	灯籠流し 旧7月18日、8月18日	エッサッサに供えていたものを麦藁の束を2つ作り、それを十文字に縛り船を作り、麦藁等で繋いで四角平面を作る。お土産に瓢箪の形をした団子を作り、仏さんに持たず(灯籠に乗せる)。四隅に竹を立てて半紙で囲いローソクの灯などを風等から守る。線香、ローソクに火を付けて暗い海に向けて放つ。また帰ってこいよ、と言いながら手を合わせて戒名を唱える。新仏の家では新仏は31日まで家に居るため、31日に流していた。現在は新仏の家のみになりつつある。	B
	96	2・8	生名八幡神社の秋祭り 10月第1土曜～日曜 (旧8月14日～15日)	平成12年(2000)以降、10月第2月曜が祝日となり、第1土曜・日曜が祭礼日となった。第1日目の夜から夜殿祭(宵宮)が行われ、夕方の6時頃から南北の蒲団ダンジリと屋根ダンジリの4台が(現在は2台)出て「ソリャーノシタ・ソリャーノシタ」と掛け声を掛けながら境内を練り歩く。社殿の中では神主が祝詞を上げてお祓いをし、巫女が舞を舞う。氏子はお供え(現金)を持って参拝し、お神酒をいただきお祓いを受ける。第2日目は本祭で、朝6時に宮出し(出遷宮)があり、神輿とダンジリが境内を後にする。ダンジリが鳥居の下を通るときは乗り子は「始めましょ、がってんだ、ヨーシ、ヨーシ、ヨーイヤサ、ソリャーノシタ、ソリャーノシタ」と掛け声を掛けて太鼓を叩き鳥居を抜ける。この時は太鼓の叩き方も違っている。南のダンジリの太鼓の叩き方は北のとは違っていた。神輿は白装束に身を固めた男たちによって「チョーサジャ・チョーサジャ」と掛け声を掛けながら境内を回り、鳥居を抜け、五穀神社(御旅所)で天之御中主命を拝み、巫女たちが舞を奉納して村巡りをする。ダンジリも南北に分かれて村巡りをする。「チョーサ」は屋台、神輿を表し、ひいては神を意味する言葉である。昔は当屋(頭屋)制度があり、頭屋には新築した家とか地域の有力者がなっていた。そこで休息をして飲食等の振舞いを受ける。神輿もダンジリも二日間かけて村巡りをした。神輿と神主等が一番頭屋の家に宿泊をして、翌日は二番頭屋の家に宿泊して、夕方お宮に帰る(入り遷宮)。ダンジリもお宮に帰って鳥居をくぐる時は出る時と同じ様にして鳥居を抜ける。乗り子の希望者が多い場合は時間制で乗っていた。乗り子は神になるための化粧をして派手な長襦袢を着て帯でタスキをし、それを欄干の外に垂らす。ダンジリを担ぐ時の掛け声は「バラバラトウ、デンシンタヨリニ、コリヤヤッサ、ヨイヨーイヤナ、ソリャーノシタ、ソリャノシタ」、ダンジリが落ちた時は「若い衆怪我な、怪我なきゃ降ろせ」、ダンジリを引きずる時は「ヤットコセー、ヨーイヤナ、ラーラーラララララ、エンヤー(太鼓・ドンドンドンドン)、エンヤー(太鼓・ドンドンドンドン)、ダンジリが担がれて安定した時は「ノーエ節」が歌われた。相手のダンジリが落ちた時は「よーわいね、よーわいね」とからかう言葉を発する。掛け声等は生名村誌を参照。太鼓の叩き方は南の方は「上り太鼓」と云い「ドン、ドン、ドンドンドン」で北の方は太鼓名は不明で「ドンドンドン、ドンドンドン」叩いて競い合っていた。また、「北のドンツベ」「南のドンツベ」「ケナリヤカ取りに来い」とか「オドリヤ」「ストレ」「ブチコロスト」とお互いに悪口を言って大喧嘩を引き起こすこともあった。村巡りから帰ってきた神輿とダンジリは境内を走り回り、宮入りする神輿とそれを阻止するダンジリの罅迫り合いが続き、10時過ぎには神輿が宮入りして終わりとなる。現在はダンジリも神輿も人手不足のため、トラックと台車で運行するようになった。地区委員が祭りの世話をし、地区ごとにお祓いを受け、巫女が舞を舞っている。昔は乗り子を男子に限っていたが、少子化のため女子も乗れるようになった。	B

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
上島町	96	27	亥の子(亥子) 旧10月最初の亥の日	旧暦10月の最初の亥の日の夕方から子の日の朝方まで、男子が地区毎に集まり、地区の家を一軒一軒まわって「おじさん、亥の子を搗かしてください」と言って、了解を得ると庭で亥の子唄を唄いながら亥の子石を搗き、終わると家の人がお菓子、お金等を渡してくれた。全般的にめでたい唄「一で俵を踏ん張ってとか、イチーブ・ニブの木サンで…と唄い、最後にエーサッサエーサッサ繁盛せー、出世せー」で亥の子を搗く。小学校の上級生がこの行事を仕切り、終わると参加した子供たちに分配する。上級生がすべて多くとるのが常習であった。亥の日と子の日(亥ノ刻～子の刻)にかけてするので、亥子ともいう。亥の子を搗かさないか振る舞いの悪い家には「亥の子を祝ぬ家は、鬼を産め、蛇を産め、角の生えた子を産め…」と悪態をつく唄を歌った。また、亥の子の前に炬燵を出すと火事になると言われ、この日に炬燵を出すこととされていた。	B
	96	17	こんびらさん 旧10月10日	生名村は船の出稼ぎが多かったため、讃岐のこんびらさんの大祭の日に「御講」の連中が集まって飲食を共にし、神に航海の安全を祈願した。	B
	96	28	ミーマ(巳午) 12月最初の巳午 (辰巳の説もあり) 正福寺	新仏の正月法要が正福寺で行われる。巳の日に本堂で法要をし、午の日に各家庭に行ってお経を上げる(辰巳の場合も同じ)。親戚等から一升餅が供えられるが、堂内に沢山飾り各家の供え物の競い合いが見られた。墓には左縄で編んだ注連縄を張り、4・2・3本の足をつける。供える餅の積み方は、小さいのが下で大きいのを上に置く(上下が同じとの説もある)。餅を供えてくれた人を招いて料理を振る舞うが、魚を使つてはいけないとされている。新仏の家に巳午餅と言って餅2個を持って行き、巳午が終わると巳午返しと言って1個が帰ってくる。しかし、今は餅ばかりではと言って、餅に代わるジュースとか、お菓子を供えるようになってきた。	B
	96	20	くんちの節句 旧9月9日	農家では秋に穫れる丸い物、秋の味覚(栗、柿、みかん、薯等)を神に供えて、作物等の豊作を祈った。この日は畑仕事を早めに切り上げて節句を祝った。この日に遅くまで働く人を「ドラの節句働き(普段働かない人が働くこと)」と言われた。	C
	96	エ	冬至の日の行事 冬至の日 各家庭	この日は中風除けとなる「かぼちゃ＝ポーラン」を食べ栄養をつけ、柚子湯に入り体を温めると風邪を引かない、また、冷えない、アカギレ・シモヤケにならない体になるといわれている。	B
	96	18	大晦日 12月31日 (旧12月31日)	昔は生名村で蕎麦を栽培していたので蕎麦汁を作り、年越し蕎麦として神前に供え一年の平穏無事、安泰を感謝して家内一同で食べた。	B
	97	6	オトウ(親頭)	祭壇を設け、宮司を呼んで祝詞をあげ、サカキを奉納。地区の繁栄・各家の安全、無病息災、繁栄を願う。懇親を深める。	B
	97	29	お大師さん(島四国) 旧3月21日 島内の石仏・札所・接待所	弘法大師空海の入定日に島内にある88か所の石仏を巡る行事で、島四国ともいう。各札所でお菓子などの接待がある。近年は各地にあるお堂や集会所を中心として接待所を設け、おにぎり、お菓子などを渡す。各自で札所を担当し、接待している箇所もある。	B
	97	19	お盆 8月15日	地踊りと称し、太鼓のリズムで口説きながら踊る。男女、浴衣姿で団扇をもって踊る。	A
	97	1・18	とんど焼き 1月15日	正月飾りや神棚の古い神符などを集めたり、各自で持ち寄り海岸で燃やす。地区の中学2年生が世話役となり男女を問わず子どもが参加する。カネ、太鼓をたたき「とんどたく、とんどたく、とんどたくぞ」と叫びながら地区をまわり、2回目は「とんどたく、とんどたく、いまくぞ」とふれてまわる。たき火にあたると風邪をひかないとか、こげた餅を食べると病気になるいとか言われる。	B
	97	27	亥の子さん 11月最初の戌・亥の日 集会所	各地区の子ども達が宿親(中学2年)の所に集まり、持ち寄った餅米で紅白二段重ねの餅をつくり飾る。今は地区集会所が宿所となる。少子化により、女性も参加するようになった。五輪さんを各家の庭でつきながら、五穀豊稔・無病息災・繁栄を願い、その家にあう歌を唄う。歌は地区によって異なるが、稲の唄、お船の唄、弁天さんの唄、一ぶ二ぶの木唄、人の道の唄の5つある。各家から接待として、小銭をいただき、費用弁償の残りを参加者の子どもに分配する。	B
	97	2	亀山八幡神社の秋祭り 10月第2土曜～日曜	行列は獅子舞、奴子、浦安の舞、神輿、ダンジリである。獅子舞は海原地区、奴子は高原・大谷地区が担当する。神輿は、5村だけとなり、ダンジリ(壇尻)は西・東の2つでどちらも太鼓壇尻であり、若者が担ぐ「担ぎダンジリ」である。	B

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
上島町	97	8	門戸念仏・総祈祷	門戸念仏は、大数珠を持ち、地区内の各戸をまわっていたが、今は公民館に集まり、各戸の姓名を言ったのち、鐘をたたくりズムで皆で大数珠を繰る。地区内の全戸で実施、無病息災、繁栄を願う。総祈祷は、寺で祈祷する。大般若経をととなえ、般若心経を皆で10回唱え、地区・各家の無病息災と繁栄、安全を願うと同時に交流、親睦を図る。	B
	98	1・18	とんど 1月14日 魚島井の浦	正月のしめ飾りを焼いて、その年の無病息災を祈る男の子の行事。とんどは5～6mぐらいの四角錐で、各地区の上級生がリーダーとなって組み立てられる。縦棒、横棒はいずれもクスギの木を用いて、中に詰めるあんこは、しめ飾り、暮れの煤掃きに使った竹棒を入れ、とし縄で包み、万国旗や吹き抜け、短冊などで飾る。この組み立ては、広場や屋敷の広い家で行われ、当日浜辺に運び出されると、地区の人々は自分たちの地区のとんどを囲む。潮が満ちあがりになったころ、とんどに点火される。鎮火し、灰になると正月中神棚に飾っていた重ね餅を灰の中に入れて少し焦がし、家に持って帰り食する。また、灰も塩水で浄め魔除けのために家の周りに撒く。一方子どもたちは焼け残った縦棒・横棒を大将以下順に分け前として家に持ち帰り薪としていた。戦後しばらく続いていたが、その後緑地化運動や新生活運動などの影響でぼったりと途絶え、お飾りは道端ではやし(燃やし)ていた。昭和49年、この行事を懐かしむ壮年会、青年団、老人会クラブ、PTAなどが復活させた。その後数年はクスギを使用していたが、切り出し等に支障があり、使用材料は青竹を使用することになった。また周囲を囲うとし縄は老人会の手で編まれるようになった。しかし、その後は材料のわらの入手が困難となり、またとし縄を編む老人も手薄になり組み立てず、平成19年からはしめ縄を重ねて燃やすようになった。	B
	98	19	てんてこ 旧7月15日 魚島篠塚	この日の干潮から満ち潮に変わろうとする頃、砂浜の渚に東西2班に分かれた男児行列が、中央から2～30m離れた位置から陸側に飾られた陣屋に見立てられた祭壇に向かって練り進む。列の横には両手に束ねた竹笹を持った先ダイバン、後ろに六尺棒を持った後ダイバンと馬糞紙に銀紙、金紙を貼って手作りの鎧や兜をつけたり、思い思いの衣装にたすき鉢巻、手には紅白を巻き棒や刀を持った顔には白粉などを塗った2～30人の男児が列を作り、陣屋のそばで鳴らす鐘や太鼓のリズムや、「テンテコテンテコテンテンヤー、ヤ〜コリヤサコリヤサ」という掛け声とともに左右に飛び跳ねながら練り進む。囃し立てると、先ダイバンは後方に向き、後ダイバンは六尺棒を持ってこれを防ぎ、互いに競合いのありさまをなし、先ダイバンが前身せんとすれば後ダイバンは六尺棒を持って先ダイバンの尻、頭を突き怒らして戦いをいどみかける。すると先ダイバンは後を向き相手となり互いに戦う。中央近く差し掛かると、東西の後ダイバンがそれぞれ東の後ダイバンが西に、西の後ダイバンが東にと交代し、それ待とと同じなりをする。東西テンテコの勝負が終わるとダイバンの持っていた笹は見物人が奪い合って小さい枝をもらって我が家の戸口にさして置き、悪魔、病魔を追い払うのに使う。テンテコは篠塚守重公が世田城の落城するや、沖ノ島(魚島)に逃げてきてから、島民を訓練したなごりと伝えられている。	B
	98	27	亥の子 11月亥の日 魚島	農家の五穀豊穡を願う行事。昼頃から各地区ごとに上級生をリーダーに男子たちが集まり、亥の子の石、三宝、野菜、菓子、柑橘類を集めてきてリーダーの家または屋敷の広い家に祭壇を飾る。夕食ごろから地区の各家を亥の子の唄を唄い、順番について回る。各家つき終るとリーダーはお金をいただく。全家庭つき終わるとリーダーの家に集まり、リーダーが集まったお金を学年ごとに差をつけて分配する。飾られた物品も配分する。男子だけで行われていた亥の子に、昭和60年頃より女生徒も加わり、集会所に祭壇を飾り、2～3班に分かれて各家を突きまわるようになった。令和元年よりイノシシの出没による危険を回避するために漁港施設の土のところで行うようになった。住民は見学に来る。児童生徒が現在4名で、以前のように集金はない。	C
	99	8	関道神社の秋祭り 10月1日～3日 関道神社	関道神社は、大山祇神、雷神、高麗神を祭神とする神社であり、高井神島の北端にある宮ノ越鼻に位置する。古くから、宮ノ越鼻の前を通過する船は、帆を下して神社を祈願してから通過したとされる。祭りは10月3日に行われる。祭りの参加者は神社に着くと小石を12個拾い、お宮の周りを一周し、小石を1つ落とす。これを12周繰り返して家族の健康を祈った。昔は歳の数だけ周ったようである。島民の減少により神輿が出ないこともあったが、魚島から応援隊が参加するなどして出すこともあった。現在は、島民が少なくなり参加者がいないため、祭りを中断している。	D

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	100	32	八社参り (松山八社八幡めぐり) 不定期 各神社	春と秋の社日にお参りをする。お参りしながら他村の麦や稲の成長ぶりを観察する。松山八社は湯月八幡(伊佐爾波神社)、桑原八幡、日尾八幡、正八幡、日招八幡、山崎八幡、還熊八幡、勝山八幡である。団体で参るほか、個人で八社めぐりすることもある。湯月、朝日、還熊、勝山は動かないが、他は城主の代が変わると八社が変更されている。	A
	100	エ	たごり大明神の夏祭り (たごりさん) 7月14日～15日 堂	たごりさんのお堂の創立については諸説ある。江戸時代中期、現在鎮座している塚の中から御神体が現れた説、巡礼者の持病のぜんそくが悪化し倒れたので葬った説、「たごる」とは「せきがたごる」からといわれる説、田を守るが「たごる」に転じたという説、田心姫命からきたという説などがある。お堂は町内会で持ち回りで世話をし、毎日、水を替えに行く。お参りに来た子どもにはお菓子を配る。お堂の中には子供神輿を保管しており、10月7日の秋祭りでは町内を練り歩く。毎年7月14・15日の縁日には、付近の農家の人が、いりそら豆を持ち寄り、参拝者にひとにぎりずつ渡していた。	B
	100	8	ドジョウ施餓鬼 8月25日 御幸橋の北東土手	一年間に食べたドジョウの供養をする祭り。木屋町にあった法界寺の延命地藏を移設し祭る地藏堂で行われる。寺の近くに住む人がお参りに来た人に、ドジョウ汁のお布施をしたのが始まりとも、法界寺の僧がドジョウを川に放って供養していたことがおこりとも言われている。現在は、大林寺の住職が経木に信者の氏名年齢を書き、無病息災を祈っている。経木は川に流していたが、今は寺へ持ち帰っている。	B
	100	8	還熊八幡神社の例祭 10月5日～7日 還熊八幡神社	神輿4基と子供神輿8基が出る。宮出は7時、宮入は21時。御旅所は鳥居である。御幸、山越、高砂町、木屋町に氏子があり、北山越、南山越、御幸寺町、御幸町方が神輿を出す。	B
	100	8	金刀比羅神社例大祭 4月9日～10日 金刀比羅神社	4月9日10日の春の大祭には福入モチ投げがありにぎわった。金刀比羅講でにぎわったようすは、境内の玉垣や奉納物が物語る。祭典、うどんのふるまい、もちまきなどがある。	B
	100	8	井出神社の秋季例祭 10月5日～7日 井出神社	6日に祭典、7日に神輿渡御がある。宮出は午前6時、子供神輿は12基、大人神輿は立花と外側で2基出る。	B
	100	8	天神講 1月25日・5月25日 ・9月25日	正月(南組)、5月(中組)、9月(北組)で25日に当番が集まり、大鍋を囲んで(大根・豆腐など)親睦を図っていた。7月の天神祭には、いつも大がかりな造り物を奉納している。祭りの前には、各家から必ず一人は手伝いに行き、昼できない人は夜、提灯をもって寄付集めに回るなど町をあげ、背景を書く人、大道具、小道具をつくる人、それぞれ祭りを盛り上げていた。	D
	100	エ	天神祭 (天神祭り・天神さん) 7月24日～25日 井出神社	旧暦6月25日の天神様の誕生日を記念して学問成就、交通安全、家内安全を祈願する。大文字奉納(習字)、伊予万歳奉納(河原天神講、近年河原町振興会で奉納)などがあるほか、夜店や奉納おどりがあがる。	B
	100	19	日除け地藏の法要(日除) 8月23日 石手川公園東入口	昔は8月23日24日のうら盆の日に行われた。子どもが集まり、黒豆のごはんをたき、鐘をたたく。子供相撲が奉納された。芝居小屋があった時期もある。唐人町や新立1丁目町内会の世話で祭りが行われ、観音寺の住職が読経する。	B
	100	23	妙法浄庵さん(浄庵祭) 8月18日 お堂	江戸時代に庵寺の浄庵さんが上京家新田(八坂小学校の校地)を開墾したが、過労で倒れぜんそくで苦しみながら亡くなった。それ以来この地で祭られていたが、戦後、八坂小学校の敷地となったため移転した。その移転作業をした人が不慮の死を遂げたため、浄庵さんの碑を建て、ぜんそくや咳に苦しむ人がお参りするようになった。現在は8月18日に東築山町内会で祭礼を行っている。以前は持田の西龍寺、今は西法寺が法要し、旗を立てる。	B
100	8	夏季大祭 (多賀神社夏祭り・献燈祭) 8月3日～4日 (4月3日～4日) 多賀神社	境内では近隣町内の婦人会や子どもたちによる盆踊り大会、餅まきなどが行われる。露店も多く出る。4月3日から4日にしていたが、お城まつりと重なるので、50年ほど前、夏に変更した。	B	

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	100	8	多賀神社の秋季例祭 10月6日～7日 多賀神社	子供神輿は、3基あり、北築山、南築山、唐人町1丁目から出る。6日に祭典があり子どもが参列、子供神輿の宮入宮出が行われる。また、久谷より2頭立の獅子舞ができる。	B
	100	19	地藏祭り(梅木地藏) 8月23日～24日 梅木地藏	横に梅の木があったので梅木地藏という。いぼがおちるとか、目が治るといわれる。観音寺の住職が23日に祈祷し缶ビール等を配る。24日は隣接の会館で懇親会をする。昔は22日と23日が祭りで、盆踊りをしていた。	B
	100	19	日切地藏祭り (お日切さん) 8月23日～24日 善勝寺境内と道路	8月23日と24日に縁日がある。善勝寺の日切地藏尊は、平安時代につくられたという地藏さん。元禄年間に悪疫が流行したとき「善勝寺の地藏尊に日を切つて願かけしてお参りすればかなう」と霊夢を見た者が現れ、日切地藏と呼ばれるようになったという。8月の地藏盆縁日は市駅前の商店街が主催しており屋台が出ているが、ひところの賑わいはない。	D
	101	ウ	練り供養 4月 石手寺	石手寺は真言宗豊山派、四国八十八か所51番札所である。寺伝によれば聖武天皇の神亀5年(728)に勅宣によって大領・越智玉澄が伽藍を創建したという。縁起によれば、越智玉澄が霊夢に二十五菩薩の降臨を見て、この地が霊地であると熊野十二社権現を祀ったとき、石手寺が建てられた時の様子を二十五菩薩稚児行列によって再現し、祝う行事が練り供養である。かつては4月に開催していたが、数年前より行っていない。(平成31年4月5日に練り供養大般若祈祷会を開催)	D
	101	8	春季大祭・長壽祈願祭 4月24日 松山神社	松山神社は、松山城の北東に位置し、元治2年(1865)に伊予松山藩が造営した東照宮社殿。春季大祭は13時より開始。長壽祈願祭は、数えて71歳以上の地域の方への祈祷である。明治中期に松山神社が祝谷地域の氏神となったことから始まったと考えられる。出席者は総代や地元の議員、71歳以上の関係者。	B
	101	17	早苗祭 5月17日 伊佐爾波神社	農耕機具のミニチュアをお供えする。以前(農事試験場があったころ)田んぼがあった頃は神輿も出ていた。今では祝詞に「ありとあらゆる産業の発展を…」という文章となっている。	B
	101	15	オオハラエ(オオハラエ) 7月31日 松山神社	疫病退散のため、半年間の罪や汚れをはらって、残りの半年を過ごす。もともとオオハラエは6月31日と12月31日に行う。茅は養生といって、新芽を育むために4月頃に手入れしておく。新芽が出るので7月29日に刈り、30日に仕上げる。材料となるいい茅を育て、きれいな茅を選定し、茅の輪を作るため手間をかけている。13時に神事を行い、その後一週間くらい茅の輪を置いておき、次の月曜日くらいに撤去する。31日の行事日に参拝できなかった人のためである。	B
	101	32	八社参り 春分、秋分に近い戌の日 伊佐爾波神社	社日に松山地方では八社八幡参りをして、春は豊作を祈り、秋は豊作に感謝する。「湯月出て桑原、日尾、正八幡、日招、朝日、還る勝山」と言われる道順で、湯月八幡(伊佐爾波神社)、桑原八幡、日王八幡(日尾八幡)、正八幡(雄郡神社)、日招八幡、山崎八幡(朝日八幡)、還熊八幡、勝山八幡の順に回る。現在は行っていない。	D
	101	17	蝗除祭(こうじょさい) 8月 湯神社	道後水利組合が参列。折り札(紙札)4体を参列者に配布。竹札に挟んで水田にまつる。	B
	101	21	道後秋祭り 10月5日～7日	伊佐爾波神社、湯神社の秋季大祭。10月5日20時から宵宮、6日が例大祭、7日が本宮である。7日は5時30分に宮出し、午後に宮入りする。7日の5時半頃から道後温泉駅前に八町八体(湯之町、道後、溝辺、小唐人、築山、大唐人、北小唐人、持田)の神輿が集まり、神輿同士をぶつけあう豪快な「鉢合わせ」を行い、多くの観光客、見物客で賑わう。神輿の鉢合わせは昭和30年代に中断していたが、昭和58年以降に順次、復活し、平成7年以降は現在の形になり、松山地方を代表する秋祭りとして取り上げられるようになった。	B
101	ウ	初天神祭・筆塚祭 1月25日 松山神社	13時より祭典。神事は総代、合格祈願者が参列。道真公の功績をたたえ、お慰めする。学業成就、入園・入学。初天神祭専用の祝詞をとなえる。13:30～筆塚祭。筆だけではなく鉛筆やボールペンもある。事前に申し込みもあれば、当日参加もある。トータルで参加者は20～30人ほど。	B	

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	102	8	橋若宮神社の秋季例祭 (小祭り・子祭り) 10月下旬の日曜 (旧9月24日) 橋若宮神社	橋若宮神社は井出神社の境内社とされていた小祠が、昭和8(1933)年に本殿拝殿の造営、昭和37(1962)年(昭和29(1954)とするものもあり)に井出神社からの分離により独立した旧橋村を氏子地域とする小社である。秋季例祭は別名「小祭り」または「子祭り」と呼ばれ(以下「小祭り」)る。小祭りは「子どものためのお祝いの祭り」とされ、かつては同地区の小坂や枝松でも小祭りが行われていたが、現在では行われていない。特に小坂の倉之町神社では桑原八幡神社秋季例祭(新暦10月6日)の後の新暦10月8日に小祭りが行われていたものの、小学校との協議により新暦5月5日に行事日が移動になっている(同行事が現在も行われているかは未詳)。かつては屋台などの出店もあり賑わっていたと伝わっている。現在の行事次第は祭典を中心に半日程度で終わる簡素なものであるが、惟神会による伊予里神楽の奉納と子供神輿の宮出しが行われている。	B
	102	21	桑原八幡神社の秋季例祭 (地方祭、秋祭り) 10月7日 神社境内及び ローソン松山畑寺店駐車場	桑原八幡神社は松山八社八幡の1つであり、桑原地区(旧桑原村)を氏子地域とする旧郷社である。本社では新暦10月7日を中心に執り行われる秋季例祭にて、神輿巡行と、神輿が集結した「かき比べ」および「鉢合わせ」が行われる。参加する神輿数は、大小併せて例年30体弱(大神輿は10体前後、地区内の日の出、東野上、東野下、正円寺、樽味、畑寺が所有)である。また、「練り」として5体の神輿が寄せ合い回転する「神輿よせ」が見られる。神輿巡行の次第は、7日早朝に宮出し後、神社近隣のローソン松山畑寺店駐車場にて、かき比べ及び鉢合わせが行われたのち、各神輿の町内巡行が行われ、同日夜間に宮入りとなる。なお、本社の秋季例祭では神輿巡行のほかに、5日の子どもたちによる提灯行列や獅子舞奉納が行われる。	B
	103	19	幸金さん(さいわいさん) 8月24日頃 幸金さんのお堂	さいわいさんは、土の中から出てきた、「幸金」と彫られた石の柱を御神体としておまつりしている。毎年8月24日頃に、町内会の行事として朝日八幡神社から神職を迎えて祈禱してもらう。	B
	103	34	庚申さん 8月23日 庚申堂	お堂にある3体の石仏のうち1体が庚申さん。像の横には享保14年と刻まれ、前の手洗いには天保14年とある。飢饉が続き荒廃した農民のよりどころとして建立された。庚申さんは庚申(かのえさる)が縁日で、組内の老若男女が寄り大きな数珠を回して念仏講を行っている。3~4分般若心経を唱える。薬師如来と庚申菩薩の念仏を3回唱える。組員の協力で維持管理が行われ、境内は常に手入れが行き届いている。縁日は今なお盛ん。	B
	103	23	山内祭り 旧4月23日に近い土曜 山内神社	祭典、神楽(伊予里神楽、4名)、もちまきがある。	B
	103	8	朝日八幡神社の秋季例祭 10月6日 朝日八幡神社	大人神輿は、大可賀、山西、清住、朝日ヶ丘、美沢、朝美一辻町、南江戸本村、古照の8基が出る。子供神輿は、年により出ないことがあり、今年の本村、古照、生石、西部、朝美一辻大小、朝美二、朝日ヶ丘、美沢一、美沢二、山西、清住、大可賀、宮西一、八代、萱町一の15基が出た。過去には25基出たこともある。宮出し、宮入りは時間の決まりはなく、各自それぞれで行う。	A
	103	23	袋町の町祈禱 8月24日近くの土・日曜 最広寺	延宝年間に袋小路の町で殺された姫の霊をあわれみ、なぐさめるために、袋町(出淵町2丁目=三番町7丁目)で祈禱をしていた。町の人たちが大きな数珠をたぐり回しながら念仏を唱えお祈りをした。数珠も袋町も戦災で焼けたので、戦後は8月24~26日に町の人々が最広寺に集まり、お祈りする。念仏を108回ほど唱える。10人位の子どもとその親が参列する。新しい数珠がある。	B
	103	15	金光尊院祭り 7月14日 金光尊院及び前の路上	13日に近くの阿沼美神社宮司による神事があり、14日にお堂前で夜店4~5台で楽しむ。	B
	103	21	四角さん八角さん (阿沼美神社秋季大祭) 10月6日~7日 阿沼美神社	阿沼美神社には3基の神輿がある。①千木造り(神社の屋根のように作られている)、②四角造り(屋根の形)、③八角造り(高御座の形)である。①は城主の命令により担ぐ人が決まる。②は町方、③は村方がかつぐ。現在は、担ぎ手は区別されていない。御霊入れの後、宮出し。お練りという行列を先頭に神輿が町内を御神幸する。宮入りや宮出しのとき、「四角さん」と「八角さん」が、かき手が両方に分かれて勢いをつけ、神輿をぶつけ合う「鉢合わせ」を行う。かき手だけでなく見物人も「もってこい、もてこい」の掛け声で興奮して鉢合わせを行う。四角さんと八角さんは、6日に神輿にロープを巻いて神輿がいたまないように準備する。町方の四角さんと村方の八角さんが鉢合わせをして、四角さんが勝てば商売繁盛、八角さんが勝てば五穀豊穡といわれる。	B

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	103	15	ワゴシ(輪越し)・夏越し 6月30日 阿沼美神社	神前礼拝の後、8の字に3回輪くぐりをする。	A
	103	8	春日社の秋季例大祭 10月4日～7日 春日社	子供神輿が5基出る。	B
	103	15	夏越祭 6月30日 雄郡神社	カヤで輪をつくり、朝から一日お参りがある。祭典は午後3時から30分程度。	A
	104	8	地藏祭り 8月24日 オノ本地蔵尊	お堂内で般若心経を読経して地区の無病息災を祈念する。以前は最後にお供えを配り、花火をしていた。	B
	104	ウ	初太鼓の禁忌 12月31日～1月7日 生石八幡神社	「年頭無鼓の神事」と称し、1月1日から1月6日までは全て祭事に太鼓を用いない。またこの期間中、日没より日の出までの間は参列しない慣習となっている。12月31日に太鼓打ち止め神事を行い、1月7日に打ち初めの神事を執行する。妖怪出現に由来するという。	B
	104	18	若恵比寿 1月1日～3日	恵比寿神・大黒神・七福神などの神像を刷った神札を「若恵比寿が舞い込んだ」と言って配り歩く。松山市高岡町においては、「明け方から 若大黒 若恵比寿 吉凶 草木よし」と縁起のよい文句を唱えながら家々を訪問。家々ではそれを心得ていて、榎に米・餅・銭などを入れて縁側に出して置いておくと、神札を置いて帰っていく。山伏が行っていたのを、民間人が代わって頒布している所もある。また、子どもや若い衆に委託して配布しているところもある。	B
	104	8	高家八幡神社の秋季例祭 10月5日～7日 高家八幡神社	5、6日には子どもたちが主体となってちょうちん行列が出る。7日には、合計7基の神輿が集結し、神輿渡御(宮出し神事→宮出し→町内巡行→宮入り)が行われる。	B
	105	27	亥の子 10月の亥の日	子どもたちが地域の家々を順に回り、亥の子唄を歌いながら棒状菓束で地面を叩く。垣生公民館域では、大黒町・大新田・波座・垣生において行われている。最近では、垣生地区でも小学生の子どものいる家のみを回る子供会もある。	A
	105	21	今出大神輿 10月7日 三嶋大明神社・住吉神社	午前5時頃三嶋大明神社にてお祓いを行った後、黒法被を着た「若衆」と呼ばれる青年軍団が担ぎ手となって神社を出発し、住吉神社で御霊入れを行う。その後10時間にわたって神輿が地域を練る。途中、神輿を家々に突っ込ませて玄関の壁を壊したり、時計を落としたり大暴れさせる。夜、三嶋大明神社に遷御(平成30年は住吉神社で行う)。この時、「家持」と呼ばれる壮年者軍団が鳥居の前で待ち構え、神社に帰ろうとする神輿を「まだまだ、地域で頑張れ。」「持てこい」の掛け声)ということで神社への遷御を阻止。これに対して若衆が神社への突入を開始し、それを家持が阻止する過程で神輿を地面に投げつけたり転ばしたりの大攻防が繰り返される。その後、神輿は神社へ還御する。	A
	105	1	垣生どんと焼き 1月15日 今出漁港	正月の松飾・注連縄・古札を持ち寄って神官がお祓いを行った後に焼き払い、その火で餅を焼いて食べ、健康と幸福を祈念する。	A
105	15	夏越祭 7月30日～31日 三島神社・日招八幡大神社 ・素鷲神社	各神社から「ひな形」が配布されると、氏子は自分の干支と性別をそれに記入し、夏越前日の30日夜に枕の下や布団の下に敷いて寝る。起床後、ひな形で頭や腕や胴などさすっておき、夏越歳当日に神社へ持参する。神社に入るときには茅の輪をくぐってから入り、お参りの際にひな形を納める。	B	
105	8	秋季例祭 10月5日～7日 三島神社・日招八幡大神社 ・素鷲神社	5日に提灯行列、6日に例祭祭典を催行。7日は神輿渡御。	B	

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	105	8	鍵谷カナ姫命祈年祭 5月28日 三島大明神社	村の産業を盛んにすることを目的に、村上霽月が中心となって鍵谷カナ姫頌功会を創設。カナの命日の5月28日に遺徳を偲ぶ祭りを行うようになった。平成16年当時、頌功会の世話を機織物の今出支部が行っていた。平成2年から垣生公民館との共催で鍵谷祭を実施。地域の人々や垣生小学校、垣生中学校の参加を得てより活発なものとなる(慰霊祭は鍵谷カナ頌功会で実施)。公民館では絣織物と絣柄のパネル展示を実施。中学生は俳句の発表会や句碑巡りを行い、生徒代表が鍵谷祭に参列。小学生も鍵谷祭記念なかよし集会を開き、カナについて調べたことや俳句の発表、機織りの観察や句碑巡りを行う。また、三島大明神社では相撲大会も実施。	A
	106	18	大般若 1月10日 円明寺	法類寺から僧侶を招いて加持をする。焼き清める行事で、人々は1年の無病息災などを祈る。この時干支を聞く。	B
	106	15	三宝荒神 7~8月の土用丑の日の 後数日以内 三宝荒神(光明寺境内)	元文年間に虫害を退散させた靈験にちなみ、現在は堀江土地改良区の役員が集まって虫祈禱を行う。	B
	106	21	一体走り 10月6日~7日 勝岡八幡神社	10月7日に行われる勝岡八幡神社の秋の祭礼に行われる神輿のかき競べ行事。社頭から御旅所までの参道約100mを、氏子の青年が神輿をかついで疾走する。走りこみの順番は安城寺、和気、太山寺、和気浜、高浜6丁目で行われる。青年たちは塩垢離をとって身を清め、鉢巻を締め、禪姿に襷掛けで神輿をかつぎ、神輿を上下左右に動揺させぬように、美しいフォームで速く走ることを競う。(市)	B
	106	18	お日待ち 1月4日前後 福角町	福角町の字(岡町・中筋・松尾・北谷)毎にしている。中筋では新築の家(最近では新築に限らない)をヤドにして皆が集まり宮司にお飯をして貰って新年会(酒・寿司・菓子など)をする。宮司が来る時間は決まっていないが午前中には終わり泊まらない。諸準備は町内会の世話人が行う。供物はタイ・ワカメ・野菜・果物など海山の幸。煮干しを供える地区もある。昔は満潮時の海水を取りに行ったり、石に付いた藻でないといけないなどと言っていた。参加者はお札と餅を持ち帰る。逆に綱つた注連縄を飾る。中筋では代表者が集まって行い、松尾は戸数が少ないので公民館をヤドに行う。	B
	106	15	夏越の祓・輪越し 7月31日 正八幡神社	参拝者は茅で作られた大きな輪をくぐり、続けて左右左と回る。昔は輪くぐりはしていなかった。紙の人形(今は長方形)で身体を撫でて神社に納め、罪・穢れや禍を祓い清める。人形は町内会が神社に氏子全員分を貰い、年齢と名前を記入する。	B
	106	16	宮島さん (十七夜・北松山港まつり) 7月17日前後の学校夏季 休暇日 厳島神社	堀江港にある安芸の厳島神社から勧請した神社を参拝したあとに行う、北松山祭りの催し。堀江うみてらすに夜店が出、花火も打ち上げられる。	B
	106	10	祇園さん (祇園神社のまつり) 7月4日 祇園神社	神事後、子供相撲などが催される。「牛頭天王」の幟を掲げる。神紋の五瓜唐花紋が胡瓜を輪切りにした切り口に似ることから、祭礼の前日や当日は胡瓜を食べない。	B
	106	10	神明さま (しんめんさま・しんめいさま) 4月21日に近い日曜 内外神社	内外神社(神明さま)の例祭に、餅撒きや奉納子供相撲や小学生のプラスバンドで賑わう。令和3年度は4月18日に行った。昔は子どもが鈴を持って踊っていたり、大人相撲もやっていた四股名(石丸山など)をまわしに付けていた。	B
	106	27	亥の子 旧10月亥の日	小学生から中学生が行う。昔は石に付ける縄は家で編んでいた。縄は四方八方に付けたが、今は2本だけしか付けないところもある。アスファルト舗装されているので座布団を敷く。	B
107	8	久枝地区の秋祭り 10月5日~7日 久万ノ台・東長戸・西長戸町 ・安城寺町・高木町	三島神社(久万ノ台)、諸山神社(東長戸・西長戸町・安城寺町の一部)、勝岡八幡神社(安城寺町)、阿沼美神社から出た神輿などが練る。	A	
107	23	一字一石の供養塔 50年毎 安城寺町	享保の飢饉の餓死者を供養する一字一石経塚に、50年毎の塔婆を建てる。第1回の安永10年から第6回の昭和54年まで続く。	A	

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	107	8	成願寺薬師堂のお講 4月18日 成願寺薬師堂	眼病平癒に靈驗ある出雲の一畑薬師を勧請したお堂。かつては講があり伊予万才なども行っていた。	D
	107	19	庚申堂の供養 8月申の日 庚申堂	保具組の7班が輪番で祀る。お盆には3年以内に亡くなった人を供養する。	A
	107	8	お通夜 5月 常夜燈	正面に「金」と「石」、背面に「慶応四年五月吉日」と陰刻。戦前は、お通夜をしていた。各戸が米1～2合を出し3戸交替でおむすびを作り、煮物や竹輪を持ち寄って供え食べた。	D
	107	8	友近神社の通夜 1月・5月・9月の各8日 友近神社	河野通直の家臣友近忠吉の徳を仰慕して村民が祭祀。通夜は1月・5月・9月の各8日に行い、氏子各戸から米2合5勺と金を集め、御神酒・握り飯・菓子などを参加者で食べる。	A
	107	8	熊野神社のお日待ち 1月・5月・9月 熊野神社	講メンバーが3班(南組・中組・北組)に分かれ、当日夜に集まりメンバー中の先達がお祓いをし皆で祝詞を唱えたのち、お神酒や握り飯・菓子を飲食しながら一夜を過ごす。	B
	107	8	上所の薬師堂の大数珠 7月16日～17日 薬師堂	組中の大人と子どもが境内で輪になって念仏を唱えながら大数珠(長さ10m)を回す。親玉が巡って来た者は礼拝する。	A
	107	23	若宮社の祭り 11月10日 三島神社境内	天明の飢饉の時、松山藩に年貢軽減を嘆願して処刑された庄屋若宮新七の功績を称え、五穀の神として祀っている。祭礼では神楽を奉納。	B
	107	23	斎院のたごり神様 8月	持病の喘息の発作で死んだ勤皇志士を祀る。咳の神様。藁草履片方を供えて祈願し、病気が治るともう片方を供えてお礼参りした。藁草履の供献は途絶え、今は野菜(茄子・胡瓜)を供える。	B
	107	23	宮の谷の延命地藏 8月23日	江戸時代の飢饉や伝染病による死者の慰霊に地藏を祀る。無病息災・家内・村中安全、五穀豊穣を祈願。	A
	107	8	潮見大権現 潮見山山頂	伊予国守護河野氏の家臣、大内伊賀守信泰を潮見大権現として祀る。お通夜・秋祭や頭家宅で鈴神楽を行う。	D
	107	8	潮見観音 旧7月9日 観音堂	扁額に「潮見山十一面観音・観音堂」とある。祭礼日に参ると、四万六千日のご利益があると言われる。	A
	107	8	高城の弥勒様 8月1日	花崗岩に彫った弥勒菩薩坐像を信仰。知恵の神様。花や供物が絶えない。	A
	107	23	福六の新田様 8月	享保の飢饉や伝染病による死者の慰霊に旧伊予郡南山崎村(伊予市)の新田神社から分祀して、無病息災・家内・村内安全、五穀豊穣を祈願。	A
	107	23	松布祢権現者 旧7月1日	天正13年、長宗我部氏との戦いで死んだ河野氏の家臣、松船兵衛門之守や白石若佐太郎ら33人の墓を慰霊。墓は三十三人様と呼ばれる。	A
	107	8	菖蒲谷の地藏 8月23日	御詠歌を唱え、無病息災と村の守護を祈願。おむすび・きな粉餅・団子・お菓子を供え、行燈に火を灯す。	A
	107	8	生木の地藏 8月24日	枯れた松の根株から発見された、隠れキリシタンが信仰したと思われるマリア像の石柱を、村人が堂を建てて供養。	A
	107	8	カヤの木さん 8月24日	カヤの木の巨木(松山市指定天然記念物)周辺の幾つかの祠を祀る。	A
	107	8	たごり地藏 8月24日	寛保3年、住職の法印快翁が即身成仏をした際「たごり(咳)に苦しむ人の願いを叶える」と遺言して、多くの人が参詣。	A
107	8	眞光庵の観音講 毎月17日	昔、寺があり千手観音菩薩が置かれ、毎月17日に観音講が開かれていた。現在は石碑のみ。	D	

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	107	8	子安地藏 随時	明治25年、地元の産婆倉田チイが、妊婦の安産を祈念して屋敷内に子安地藏を安置。以来、大数珠を繰り念仏を唱えて祈願。現在、屋敷北西角の扉を取り除き誰でも参拜できる。	A
	107	29	お塚様(おつかさま) 8月16日	行き倒れの遍路を葬り、お塚様として供養。	A
	107	8	素鷲社 5月15日	五穀豊穰・無病息災を祈願して神楽を奉納。休みなく100年以上継続。	A
	107	23	和霊祭 7月23日	山家清兵衛が蚊帳の中で不覚を取った故事にちなみ、当夜は蚊帳に入らず願えば諸願成就すると伝わる。	A
	107	5	たごり神様 9月	風邪で亡くなった旅人の死を村人がいたみ創祀。中組の有志がおにぎり等を奉納して、風邪などの病氣平癒を祈願し、祈願の成就には足半草履をお礼に供えたが、現在は祠を清掃するのみ。	D
	107	8	庚申待 12月申の日	青面金剛を祀って徹夜をする。昔は陰暦閏年閏月庚申日に行った。山伏姿の修験者が星岡町から来て祈祷している。	A
	107	18	若水汲み 1月1日	昔は男子が若水を汲んで雑煮を炊いて神に供え、その後女子が炊事に汲んだ。現在は水道水の若水で男子が雑煮を作る。	B
	107	1	どんど焼き 1月14日～15日	みどり小学校・久枝小学校の児童が総合学習の一環として、地域の人たちと一緒に、旧正月に、各家庭から持ち寄った正月飾りを運動場で燃やして願い事を祈願している。	B
	107	15	節分 2月3日	立春前日、神棚に供えた炒り豆を、当主が夕方撒いて鬼を払い福を招く。門や玄関にイワシの頭を竹串に刺したオニグイやヒイラギのの小枝をたてる。	A
	107	20	上巳の節句 4月3日	昔は寒の内(大寒の頃)に餅を搗き、あられ・かき餅など手作りして供えた。翌4月4日は「ひなあらし」と呼ばれ、弁当持参で花見をした。	A
	107	20	端午の節句(菖蒲の節句) 5月5日	軒に菖蒲を挿し込んだり、菖蒲・ヨモギ・カヤの束を屋根に投げ上げる。ちまきや柏餅を食べる。男子が生まれた家は、庭先に鯉のぼりや幟旗、屋内に五月人形や兜飾りを飾り、当日には親戚を招いて男子を祝った。	A
	107	15	大祓夏越大祭 ・ワゴン(輪越し) 7月31日 三島神社・素鷲社 ・諸山積神社	あらかじめ各神社から貰った人形に、生年・干支・性別・年齢を書き、寝床に敷いて寝て、翌朝人形で全身をさすり、夕方、人形を持って神社に行き、輪をくぐって持参した人形を納め、帰路は輪の外を通って帰る。	A
	107	20	七夕節句 8月7日	前日の朝、サトイモの葉やイネの穂先の朝露を盆に集め、この水で墨をすって願い事などを五色の短冊などに書き、葉竹に飾った。	A
	107	19	盆の迎え火・送り火 8月14日～15日	仏の案内に14日の夕方に迎え火、15日の夕方に送り火を焚いた。子供組が麦藁で大サイト(柴灯、直径60cm、長さ3m)と小サイト(直径20cm、長さ2m)を焚き、大小の行燈を灯す。	D
	107	9	安城寺神輿の川狩り 10月7日	青年取締(頭取とも)と勝岡八幡神社一体走りメンバーが巡幸を終えた神輿を久万川(祓川とも)に担ぎ入れて洗い清めていたが、川の汚染で昭和42年頃中断。和霊橋で神輿と禪の一つの若者に観衆が大桶の水をかける。平成12年に、33年ぶりに復活して継続実施している。	B
107	27	安城寺の亥の子 旧10月亥の日	安城寺町南組では、中学3年生がリーダーとなり、子ども達が、亥の子唄を歌いながら家々を回る。	B	
107	8	つうや 不定期 北組集会所	安城寺地区で行き倒れた人を供養する。北組の女性が集会所に集い、御霊供を供え酒を備える。世話は北組4班が毎年輪番で行う。	A	

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	108	18	若水汲み 1月1日	若水とは一年で最初に出す水のこと。かつては井戸や海から汲んでいたが、現在は水道から出す。神棚に供える灯明や料理などの準備は女性が行うが、行為自体は家長の男性が行う。	A
	108	18	十日えびす 1月10日 恵美須神社	屋台が出て餅つきなどの催しが行われる。戦前には、奉納相撲があり小学生を集めて子供相撲をしていた。	B
	108	18	町祈祷(帳祝い) 1月～2月の早いうち	町内で行う町の安全を祈願する行事。昔は帳面の祈祷ということで商人向けの行事であった。神社で霊入れした箱の下をくぐって厄払いをする。毎年決まった家に札を釘で打ち付ける。札ははがさず毎年新しい札を重ねていく。町境の家には特に大きな札を打ち付ける。神輿が出る。般若心経は開いて読んだことにする。祈祷は神主か僧侶が行う。	B
	108	15	節分 2月3日	豆は神棚に供えてから豆まきする。厄落としとして、数え年の数の豆を紙に包んで、町の十字路へ落としてくる。高齢だと豆一粒を10歳と数えることもある。	A
	108	20	節句 4月3日	桃の節句。1か月遅れの4月3日に行っている。「野良の節句働き」といって、節句に働くと貧乏になるとか、ぶらぶらしていた人間は節句に働くとかいった言葉があることから、商人は節句に休みをとり、ちょうど桜の時期なので弁当や羊羹を持って花見にいった。現在は通常通り働く人が多いが、この日を休みにしている店もある。	B
	108	20	端午の節句 6月5日	場所がないため、こいのぼりを揚げる家は減ったが、20年前は6月まで揚げていた。柏餅と醤油餅をつくる。柏餅の葉には山帰来(サルトリイバラの葉)が使われることが多く、子どものころはこれが柏だと思っていたとのことである。葉菖蒲を墓や仏壇に供える。	B
	108	15	ナゴシ(夏越)・輪越し 6月30日 三津厳島神社	半年のみそかとなる6月30日に行く。旧暦に合わせるところもある。神社から紙製の人形を買い、これに名前や歳を書く。人形は、神社が家に売りに来ていたが、コロナ禍になり売りに来なくなったため神社へ買いに行くようになった。前日29日の晩に人形で体を撫でまわし、体の下に敷いて寝る。忘れた場合は当日の朝に人形で体を撫でまわす。人形は神社へもっていくと御守札と替えてもらえる。去年もらった御守札は神社に還す。お宮の入口には茅で輪がつくってあるので、これをくぐる。	A
	108	8	おえべすさん 7月10日 (7月9日～10日) 恵美須神社	恵美須神社の夏祭り。人形浄瑠璃の伊予源之丞がでる。かつては宝くじのようなえびす富くじがあったが、現在は札を買ったらくじを引いて、えびすにちなんで鯛や酒をもらうという形になった。26～7年ほど前に現在の形になったという。	B
	108	8	十七夜 7月17日 三津厳島神社・正念寺	厳島神社神社の夏祭り。平成28年から正念寺と合同開催。伊予里神楽があり、餅まき・お菓子まきが行われる。	B
	108	19・33	三津浜の盆行事 8月13日～15日	ご先祖様を13日に迎え、16日に送る。迎え火は麻殻を焚く。昔は道が土だったため家の前で迎え火を行っていたが、現在は庭のすみで焚く人がいる程度である。仏壇には「がきもち」や「がきめし」を供える。盆棚は新盆のときのみ仏壇の横につくる。三津浜は人の出入りが多く、様々な宗派の家があり、宗派によって盆の作法は異なるようである。	B
	108	27	亥の子 1月子ども会の餅つきの日 (11月亥の日) 三津浜公民館	地面がコンクリートになり行事としてはすたれてしまったが、亥の子を子どもに伝えたいとの声があがり、1月の子ども会餅つきの日に亥の子石をつくようになった。中学生のボランティアと小学生が参加している。	B
108	28	みんな 12月巳の日 新仏の墓	新仏のお正月。三宝に乗せて仏壇に並べていた餅を持っていき、墓の前でわら火で焼く。その日についたもち火を加えないという決まりがあるが、みんなの餅は火で焼いて食べる。焼いた餅は刃物の先に刺し、肩越しに食べさせる。普段やらないことをする。最近は簡略化されて肩越しに食べさせることはなくなった。昔は夜中にやっていたが、最近は昼間に行っている。	B	

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	108	ウ	おしょうね入れ(御霊入れ) 新造船完成のとき	新造の船にご神体を納める儀式。ご神体は四角い木の箱で、船大工が執り行う。大漁旗を立てる。お供え物はすることもある。船行祈願である。	B
	108	ウ	かわらすえ 船を起工するとき	船の起工式。船大工が行う。船底をかわらと呼ぶことから、底(かわら)を据える、「かわらすえ」というようになったようだ。	B
	109	18・31	釣り初め 1月上旬	現在は行われていないが、1月5日、6日までの潮の良い日に船を漕ぎ出して釣り初めを行っていた。高浜町六丁目では白石の鼻にある龍神社の沖に行き、左回りに3回旋回する。船霊に注連飾り、酒、二枚重ねの丸餅、皿の上にウラジロを敷いて人参、豆腐、鯛を盛り付けて供える。そしてイリコを海に投げ入れた後、酒を3回海に注ぐ。さらに船上に置いたイリコに酒をかけて、その年の豊漁と海上安全を祈願する。	D
	109	18	組祈祷 1月10日	1月10日に地域の平安無事を祈願して組ごとに集会所等で組祈祷が行われる。ご祈祷や村祈祷とも言う。高浜町六丁目では沖組、岡組それぞれで行う。早朝に餅をつき、注連縄作りを行い、祈祷のあとに直会を行う。注連縄に使う藁は前日の9日に満ち潮の時に海水に浸ける。神棚には「勝岡八幡神社・龍神社」と書かれた掛軸を掛け、注連縄を張る。参列者は各家の者である。不幸ことがあった家は参列しない。組祈祷の後、六丁目の恵比寿神社に参拝する。沖組、岡組ともに災難除けのために、四方固めとして、六丁目の4ヶ所にお札を立てる。疫病が発生しないことを願う行事でもある。	A
	109	18	家祈祷 1月10日	高浜町六丁目では組祈祷の前後に家祈祷(やぎとう)が行われる。勝岡八幡神社の宮司が各戸を訪問して祈祷をする。岡組では不幸がない家で各戸実施しており、沖組の場合、不漁の時や病人が出た時に実施している。	B
	109	17・31	地祝い 1月11日	1月11日は鎌などの農具を洗い清めて、農作業は行わず、田畑に足は踏み入らない。田の稲の株を掘り起こし、2本のカヤを立て、米と一升枿を供えて五穀豊穡を祈る行事を行っていたが、現在では見られなくなった。	D
	109	イ	氏神講 1月15日・5月15日・9月15日	高浜町六丁目では年3回、1月、5月、9月の15日に勝岡八幡神社にて氏神講を行う。神社総代、区長等が参列するが氏子であれば誰でも参加できる。家祈祷で神棚に供えた米や酒を持参して供える。	B
	109	イ	お伊勢講 1月、5月、9月	高浜町六丁目では農家を中心に数軒ではあるが、お伊勢講を行っている。1月、5月、9月の年3回、トウモトの家に集まって、天照皇大神の掛軸を掛けて、赤飯を供え、ろうそくを灯してお講をする。トウモトはくじで決められた順番で行い、実施日はトウモトが決める。かつては地区の常夜灯の灯りを講が交替で灯していた。	C
	109	17	恵比寿まつり 旧暦1月28日	高浜町四丁目の恵比寿神社で行われる。高浜町二丁目から五丁目の高浜漁協組合員によって行われる。朝に神社に幟を立て、酒や鯛などを供える。神事の終了後に餅やお札を配り、そして漁協の屋上から盛大に餅まきを行う。	C
	109	17	恵比寿まつり 旧暦9月15日	高浜町六丁目の恵比寿神社では、旧暦10月15日に恵比寿まつりを行っている。	C
	109	8	春祭り 5月28日	高浜町四丁目の金刀比羅神社で春祭りが行われる。海の神として信仰されており、氏子による幟立て、松山の神職で構成される惟神会による里神楽が奉納される。演目は、舞乃口、稚児神楽、四天、大魔、弓之舞である。神楽が終わると大魔が持っていた笹束を参拝者に分け、持ち帰った笹束は玄関や神棚に飾って魔除けとする。	B
	109	9	リュウゴン講(龍神講) 7月6日	高浜町六丁目の白石の鼻に龍神社がある。農業、漁業の神としての信仰が篤い。7月6日、龍神社で講が行われる。高浜町六丁目だけではなく、安城寺、和気の者も参加する。明治時代までは雨乞い祈祷も行っていた。高浜町六丁目の勝岡八幡神社総代が責任者となり、当日の朝に龍神社に幟を立てる。神事のあと宴会を行う。	B
	109	イ	宮島参り 旧暦6月17日	旧暦の6月17日に宮島に参拝する。特に船団を組むことなく、個人で実施している。新造船をおろしたばかりの年には行くことが多い。このときにはフラフや大漁旗を掲げてお参りする。	C
	109	9	勝岡八幡神社の一体走り 10月7日	勝岡町の勝岡八幡神社秋祭りの一体走りでは神輿が一基ずつ神社参道を青年がかいて疾走する。高浜一丁目、高浜六丁目も勝岡八幡神社の氏子であり、神輿を出して参加している。	A

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	109	28	巳午 12月の巳の日	12月に巳の日の正午前後に、新仏のある家では、家族、親族で墓参して、墓に注連飾りをしたり、餅を切ってみんなで食べる。高浜をはじめ松山地方では、死者の葬儀が終わったあと葬儀社から「ご葬儀後のしおり」が配布され、法事の予定、意味などが記されている。その中に巳午で使う道具である杖、草履、注連縄の3点セットを紹介した「みんなセット」の案内チラシと12月巳の日に巳午を行うことが明記されている。注連縄は、実際の正月のものとは逆廻りであり、山草（ウラジロ）も白い部分を通常は表にするが、このセットの注連縄では逆に緑面を表としている。	B
	110	32	八社参り 10月5日～7日	日尾八幡神社は、松山八社八幡三番。かつては社日詣りと称して巡礼する風習があったようだが、現在は行っていない。	D
	110	21	日尾八幡神社の秋祭り 10月5日～7日	5日が秋季例祭(本祭り)で、神事が行われる。6日には、輿神堂から二基の神輿が出され、東地域の(現在の小野、北梅本、南梅本、平井、水泥、久米窪田、鷹子の各町)と西地域(現在の北久米、南久米、天山、星岡の各町)に分かれて巡行している。7日は神輿、子供神輿などが各町ごとに巡行される。獅子舞も出る。また、7日の夕刻には、東西地域の二基の神輿のかき比べが、伊予鉄横河原線久米駅東方の広場で行われていた。	B
	111	21	小野地区の秋祭り 10月6日～7日に一番近い土・日曜	獅子舞が出る。	A
	112	18	お日待ち 1月13日 土居分館	18時から行う。各戸一人は参加する。万福寺の住職が祈祷を行い、その後宴会を行う。かつては朝まで宴会を行っていた。年始の総会であり懇親会である。	B
	112	9	椿まつり(椿さん) 旧暦1月7日・8日・9日 伊豫豆比古命神社	「伊予路に春を呼ぶ」とされる祭り。松山市居相の伊豫豆比古命神社の初祭り。神社の参道には宝船・縁起笹などの縁起物売る露店が並び、多くの参拝者で賑わう。氏子である旧石井郷10か町と旧久米郷来住町の計11か町が交代で行う「お忍びの神輿渡御」がある。祭りの中日の夜に神輿を御旅所である北土居町の金刀比羅神社まで神幸するが、神社拝殿から楼門までの間、かき夫は一切声を出さず、神輿も揺さずに静々とかき出す。道中の家々では正月のしめ縄などを焚いて神輿を迎える。御旅所のある北土居町でも家の門口や田んぼ等で合わせ火を焚いて神輿を迎える。	A
	112	27	亥の子 11月亥の日	実施日の1週間迄に町内会の指導のもと、ワラ亥の子を70～80個作る。11月の亥の日に越智町の大山祇神社境内にて、亥の子唄をうたいながら、ワラ亥の子をつく。つき終わったら、子どもたちにお菓子を渡して散会。昔は、終了後、ワラ亥の子を持ち帰って柿の木につるした。	B
	113	8	天神社の祭り 7月24日	天神社は森松町本村下組にあり、明治35年には菅公一千年祭が行われるなど地域の中心的神社として親しまれていたが、明治末に須我神社に合祀され、祭が途絶えていた。平成5年から地域の人々が集まり、神職を招いて祭を再開している。旧社地は禁足地とされ、現在も巨大な楠が住宅地の中に残されている。	B
	113	15	新田神社の祭り 9月1日 祠を管理する個人宅	森松町須我神社の南側の水田に新田神社の祠があり、9月1日に祭礼が行われていた。この祭神は「わきや」という偉い武士で、地中には刀剣が埋められているという言い伝えがある。かつては炊き込みご飯のおにぎりを作って、訪れた人をもてなしていた。祭の目的は疫病除けと害虫除けで、さらに古い時代には子どもたちがうたう歌があったという。現在、新田神社の祠は個人宅に移され、管理する個人によって祭りが行われる程度になっている。	B
	113	18	お日待ち講 年末～正月三が日 (12月31日～1月15日) 宿(当番の家) ・公民館分館	お日待ち講は12月31日から「宿・お宿」と呼ばれる家に地域の住民が集まり、新年を迎える行事である。かつては持ち回りで宿となる家を決め、そこで神職や僧侶を招いて祈祷を行い、宿が提供する料理や酒を飲食しながら寝泊まりをしていた。また、そこで地域の運営について話し合ったり、料理を始め家事について相談するなど情報交換の場であったという。現在は、宿となる家庭の負担からほとんどの地区(組)が公民館分館で実施している(取りやめた地区もある)。また、集まる日も正月三が日のうち1日を決めて実施している。井門地区(田中組)では、1月3日に公民館分館に地区住民が集まり、地区の三島神社から神職を招いて公民館内の神棚で祈祷を行う。そのあと飲食をする。また、お札を配布したり、地区の役員決めについて打ち合わせをする。以前は12月31日から宿に集まり、数日間寝泊まりしていた。森松地区では、1月2日に公民館分館に集まる。多くは仕出しを頼むが、飲食店に集まる地区もある。井門と同様に神職を招いて祈祷を行うが、善福寺がある地区では、僧侶を招いて祈祷を行う。かつては3日間、宿の家で寝泊まりしていた。	B

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	113	27	亥の子 11月初旬から中旬 (旧10月亥の日) 浮穴公民館各分館・各家庭	子どもたちが各公民館分館に集合したあと、各家々を回る。訪問した家の玄関先で亥の子石をつく。これは丸い石に鉄の輪をはめ、輪に付けた金具につないだ綱を子どもたちで引っ張るものである。亥の子石をつく際には、亥の子歌を歌う。また、各家々ではお菓子を子どもに渡すことになっている。	B
	113	15	ワゴシ(輪越し) 6月30日(旧6月30日) 三島神社・正友神社	拜殿に設置された茅の輪を氏子が3度回る。半年の災いを落とす意味がある。茅の輪は総代が事前に作ったもので、しっかり茅を締めて作った輪で茅が飛び出していない。また、各氏子に配布した紙の人形「ひながた」に名前を書き、全身をなでて、輪越しの際に神前に供える。これは、厄除けで、病気の退散や虫送りの意味があったという。	B
	113	15	節分祭 2月3日 正友神社	総代による豆まきが行われる他、神職による弓の舞(追難)が行われる。神事後、神職が境内で各方角に弓を射る所作を行い、最後に鬼門の方角へ向けて弓を放つ。この弓は桃の木でできており、以前は弓を射る前に提婆の舞が行われていた。	B
	113	8	秋祭り 10月5日～7日 (10月15日ごろ) 各神社	南高井地区の神輿は正友神社から出る。大神輿には正友神社の神霊を入れ、小神輿に高井神社の神霊を入れる。為世王神社は末社のため巡行の際に立ち寄る。かつて大橋地区の龍神社の神輿も川を越えて出ていたが今はない。神輿は新築や総代の家など希望者宅に立ち寄るなど、地域を巡行する。神輿が巡行してくる前に、各所で獅子舞が舞われる。これはお多福の面を着け、女性の着物を着た子ども役が一人、獅子が一つのペアで演じるもので、太鼓は3つあり3人で演奏するという。	B
	113	10	春祭 5月3日～4日(5月1日) 須我神社・白山神社	須我神社は3日に神事が行われ、餅まきと相撲大会を行っている。以前は男子小学生のみの参加だったが、女子小学生も参加できるようになり、近年では女子の方が活発になっている。祭に神輿は出ないが、幟は立てられる。白山神社は4日に相撲大会が行われる。	B
	113	8	清正公 11月・2月(7月23日) 清正公堂	森松町の清正公は、日露戦争の戦勝記念として広田村に建立された清正公像が水害で流出し、伊予灘で発見された頭部と胴体を森松の日蓮宗講が譲り受け、昭和7年に祭ったものである。かつては講により毎月祭事が行われ、7月23日には延立寺から僧を招いて施餓鬼法要と盆踊りが行われていた。現在は講員がならず、7月の祭は行っていない。ただし、11月と2月に、「位の高い日蓮宗のお寺」から僧を招き、清正公像の前に安置された開祖像にかけた着物を取り替える行事を行っている。	B
	113	8	虫祈祷 7月土用の入りの2日目 長禪寺	役員が祈祷をしてもらい、小学生が太太鼓や鉦をたたき、旗2本を持って行列を作って回っていたという。現在は、祈祷行事は行われておらず、いつから行われていないかもわからない。長禪寺は無住寺になっているが、花祭りや施餓鬼などは行っている。	D
113	19	イリハ(入端) 8月24日(盂蘭盆の日) 須我神社	行事当日の昼、須我神社において祈祷が行われる。これは役員と宮司のみで行われ、いったん解散する。夕刻になると今度は地区の庵地藏(地藏堂)に集まり、役員が僧侶から仏事によるご祈祷を受ける。その頃、庵地藏に地区の人たちが集まってくるので、小田原提灯を配って行列の準備をする。午後7時ごろ庵地藏から小田原提灯を掲げた行列が須我神社へ向かって参進する。行列の構成は以下の通り、①詠歌謡い：袷を身に着け、菅笠を被り、帯刀した大人二人で、神社で御詠歌を謡う。行列では先頭を進む。②御幣持ち：その年に生まれた乳児と保護者が幣とお札がついた青竹を持つ。かつては男子1人だったが、女子も参加できるようになり人数も複数になっている。③奴：四人がそれぞれ手に梵天を持ち、行列の共をする。④挟箱：それぞれ挟箱を持った二人が行列の共をする。⑤提婆：提婆は大提婆と小提婆の二名からなり、それぞれ面を着ける。大提婆は「五穀成就家内安全」と書かれた紙旗を付けた笹竹を持ち、小提婆は大提灯を携える。彼らは疫病を表すという。⑥楽人：行列が進む間、リコーダー(笛)と太鼓を鳴らす。笛は小学生5、6人が担当し、太鼓は「ハリハー」というかけ声をかける。曲は独自のもので近年譜面化された。⑦提灯を携えた地域の人が続く。行列が須我神社にたどり着くと、詠歌謡いは鳥居の前で止まり、他の者は神社前の棧敷まで移動する。棧敷には屏風と見台が置かれ、袷を身に着けた小姓役の小学生3人が座っている。詠歌謡いが「詠歌」を歌い始めると、棧敷の小姓役が「謡曲」で応じる。この掛け合いを2回繰り返すと、提婆と奴、挟箱らは庵地藏に退散する。一連の行事のあと、売店や盆踊りなど夏祭りが始まる。入端が始まると雨が止むといわれていた。	B	

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	113	8	初子祭 12月最初の土曜 (旧11月の初子の日) 正友神社	初子祭は大国主命にゆかりある神社や商家などで行われる祭りである。主催は初子講で、昭和60年には南高井32・森松2・大橋2・上野2の合計38組を有していたが、現在は森松、上野の計4講が解散し、34組となっている。午前9時から神職と総代らによる初子祭の神事が始まる。初子祭の神事の次に火防祭の神事を執り行う。午前10時から午後1時にかけて、各講の役員が神社を参拝しに来る。この役員は当番制で輪番に決めているという。役員は講金(一軒につき500円)を参拝時に奉納し、講員の神札と紋菓子を受ける。役員は参拝しに来た順に神職からお祓いを受け、御神酒と折り詰めを受けて帰る。役員は受けたお札と紋菓子を講員に配布する。平成25年まで初子祭で餅まきを行っていた。餅にはくじが付いていた。	B
	114	18	柳さんのまつり (柳素鷲神社正月例大祭) 1月4日～5日 (旧1月4日～5日) 柳素鷲神社	柳素鷲神社は厄除けの靈験ありと伝えられる小社であり、その代表的な行事が旧暦正月4日(柳)5日(末)で行われる正月例大祭、通称「柳さんのまつり」である。松山周辺で春を告げる祭りと言えば伊豫豆比古命神社の椿祭りや松山湯神社の初子祭りがよく知られているが、明治中期ごろまでは、これらに「柳さん」を加えて松山春の三大祭りと並び称されており、特に末集落の柳素鷲神社周辺では露店が並び、伊予万歳や芝居が行われるなど、そのにぎやかさは椿祭りを超える規模であったと伝わっている。	B
	115	18	堂の口明け 1月1日	日浦地区の米野町では元旦の0時になると明見神社で青年が太鼓を打って「ドウノクチがあいたぞう」と叫び、年が明けたことを知らせる。平成10年を最後に行われなくなった。	D
	115	18	若水汲み 1月1日	ドウノクチアケの太鼓を合図に、戸主(ホンニンという)は羽織に扇子を差し、注連飾りを付けた手提げ桶とお重ね餅、米、干し柿の供物を持って石手川へ若水を汲みに行った。「福くれ、徳くれ、幸いくれ、流れる黄金を俺が汲む」などと唱えて、供物を川に流して若水を汲んで持ち帰る。この若水で雑煮を炊き、洗顔した。	C
	115	18	小正月 1月15日	1月14日にはワカモチ(若餅)をつき、15日に雑煮とともにオタナサン(正月の棚)に供えた。正月の重ね餅は薄く切って歯固めの餅として保存し、6月3日に出して食べた。15日には神棚と注連飾りを下げる。注連飾りは子ども達が集めて川原でまどめてはやした。	C
	115	20	端午の節句 5月5日	五明の菅沢では、昔、飢饉や病気が蔓延して端午の節句では表立って幟をあげないことになり、以来、幟を立てない、鯉のぼりをあげないことが慣習となった。現在、五明幼稚園では毎年5月に「鯉のぼり会」が開催され、地域の高齢者も招かれ、この慣習についても紹介されることがある。	C
	115	17	おさんばいさん 5月頃	「おさんばいさん」、「さんばいおろし」と呼ばれる田の神を迎える行事。五明では、田の水口もしくは苗代に祭壇を設け、神札を立てて、ヤマブドウの蔓を丸めて、ヤマシャヤブの葉を添える。塩、米、酒、煮干し等を準備し、供える。稲が無事生育し、病害虫、風水害に遭わないように豊作を祈り、二礼拍手一礼する。現在もわずかに行われている。	B
	115	17	おさんばいさま 5月2日	日浦地区では5月2日が苗代の初播き日とされてきた。初を播くにあたり、ノドコ(野床)と称して牛王札と生木を水口に立てて餅を供え、オサンバイサマを祀った。夕方から地区内の者が明見神社に集まってモミマキツヤ(初播き通夜)が行われた。家ごとにリンマンや煮しめ、巻き寿司などを作り、家族で参加していたが、次第に戸主だけの集まりになった。	C
	115	24	村祈祷(大草履) 7月15日	日浦地区の米野町にある弥勒堂では、7月5日が縁日で地区の住民が集まり、念仏を唱えた。15日には弥勒堂で村祈祷とお山講(石鎚山の信仰講)が行われる。戸主が集まり、区長が用意した藁で全長50cmほどの大草履を作る。稲藁6束ほどを用い、5人程で製作する。出来上がると不動明王の掛軸の前に安置して御霊供を供える。そして鉦に合わせて大数珠を繰ってお性根を入れる。終わると御神酒を酌み交わし、御霊供を下げて皆で食する。これを食べると無病息災だという。大草履は集落の上、下の境目に持って行って木に吊す。	B
115	15	稲祈祷 7月中旬	五明、日浦各地で田植えが終了した頃に害虫を追い払う稲祈祷が行われる。五明では、夏の土用に入る頃に、地区順に住職を招き、行っている。お堂や集会所に集まり、大数珠をまわしながら皆で念仏を唱える。日浦では土用に入った3日目に虫祈祷を行う。弥勒堂に不動明王の掛軸を吊して、鉦、太鼓を叩きながら大数珠を繰り、念仏を唱える。念仏が終わると虫の弁当として区長の用意した握り飯をワラスボと不動明王の掛軸を竹篋に吊して集落の端から端まで歩く。最後には集落外れで掛軸を外して、弁当を川に流して終了となる。	C	

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	115	19・33	お盆の盆棚 8月13日から15日	お盆に先祖を迎えるための供物を飾る精霊棚を設ける。日浦地区では死者の出た家では死後3年間、8月1日から月末まで旗を立てる。14日晩には地区内の者が新盆の家に集まり、盆見舞いをして念仏を唱える。一般の家では13日夕方か14日朝に、庭先に盆棚を設置する。これをセガキダナとかガキボトケと称している。ニガタケを四方に立てて、1.5mくらいの高さに棚を設け、四方に寺から配られる短冊を吊す。棚には団子や素麺、水、シキジ等を供える。近年は簡素化され一本足の木の棒に棚を乗せたものが多い。16日に川に流して盆の行事が終わる。川の郷町では、庭先ではなく家の軒下に40cm四方の板を吊して、そこに位牌や水を乗せて飾る。	C
	115	19	城山の盆行事 O家近くの川	松山市五明の城山地区O家で行われる盆行事。先祖を川へ迎えに行く。あさひがらで作った綱棚の上にサトイモの葉を敷き、団子や米、夏野菜などを供える。迎えに行くと、「ご先祖、お乗りください」と言って、背中に乗せて仏壇まで連れていく。家族みんながお乗りくださいと言うため、「ご先祖は誰の背に乗るか迷うのではないか」とのこと。綱棚は川へおいてくる。O氏は子どものころから、家の近くの川へ迎えに行っているが、世代交代するとしなくなるかもしれないという。O家のほか、近所の家でも同じ行事を行っている。	A
	115	23	立ち念仏 8月15日	8月15日昼には日浦地区の弥勒堂に戸主達が集まり、立ち念仏が唱えられる。区長が人数分のニガタケと御霊供膳、御神酒を用意する。宿野町の奥之城が落城した際に川へ身投げしたのお姫様を供養するための念仏と言われる。	C
	115	19・23	川施餓鬼 8月15日	日浦地区の川施餓鬼は、武者の絵を描いた大幟を立て、鉦や太鼓を鳴らして念仏を唱えながら石手川を練り歩く盆行事である。大幟のことを「ヤスマクサン」と呼んでいる。戦国時代に「奥之城」が落城し城を守っていた7人の武将が亡くなった。その武将の霊を慰めるために始まったとされる。〔詳細調査報告33参照〕	B
	115	17	芋名月 旧暦8月15日	日浦地区では、高台にあるタカボトケで念仏を唱え、お通夜をした。参加者が里芋などを炊いたお重を持って行った。	D
	115	8	五明の秋祭り 10月5日から7日	松山市内の秋祭りは10月5日が宵宮で神輿に御霊を遷す。6日は本祭で、神事、直会が行われ、7日の本宮で神輿が宮出しされ町内を渡御する。五明では6日昼に神事が行われ、夕方には子どもによる提灯行列がある。7日に神輿が宮出しされる。神輿を担ぐ際には「伊勢音頭」等を歌う。近年、神輿をかつぐ人数が減少し、小型の庚申車に代わっているところもある。	B
	115	8	日浦の秋祭り 10月5日、6日	日浦地区の明見神社の秋祭りは旧暦9月19日、20日に行われていたが松山市内の祭りに合せた。神輿は出ず、神事が行われる。	B
	115	27	亥の子 11月亥の日	子ども達が家々をまわりながら亥の子石をつく。月の最初の亥の日を一番亥の子、次を二番亥の子、三番亥の子という。五明の恩地では三番亥の子に限って石ではなく藁で作ったワラボテで地面を叩いた。田の神に感謝し、無病息災を願って亥の子餅をつき、亥の子宿には子ども達が集まる。菅沢と神次郎では代々特定の家が宿を担い、城山、恩地では亥の子に参加する年長者の家、その他、その年に亥の子に初めて参加する子どもの家で行うところもある。亥の子唄には、一から十までの数え唄、松づくしなどがある。松づくしでは「亥の子、亥の子、亥の子もちついて祝わん者は、鬼生め、蛇生め、角の生えた子生め」等の歌詞がある。城山、恩地、柳谷では昭和50年頃から中断が相次ぎ、菅沢、神次郎では現在も行われている。日浦地区の米野町でのワラスボはカズラで巻き固め、亥の子をつき終わると柿の木に吊した。そうするとよく実がなるといわれる。	B
	116	23・29	妙円堂の施餓鬼供養 (尼様) 8月3日(旧7月3日) 心行寺	江戸時代、心行寺で弔った妙円尼という遍路を供養する。四国遍路をしていた妙円尼が疫病にかかり、久谷で行き倒れた。それを近隣の者が夜中に東方村へ捨てたという。村では丁寧に弔ったところ、東方村だけ疫病にかからなくなった。また、別の説では、公家の娘の妙円尼が遍路の途中で赤痢にかかって苦しんでいた。夜の間に村々に運ばれ、最後は心行寺で介抱を受けながら亡くなった。亡くなる間際、村人の親切に感謝して腹の病で苦しむ人を救うと遺言したという。こうした伝承をもとに妙円尼を祭る堂を心行寺に建て(このころ心行寺は東方にあった)、病氣平癒や家内安全を祈り、お施餓鬼をしている。	B

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	116	27	亥の子 11月初旬から中旬 (旧10月亥の日) 坂本公民館管内 ・各集落ごと	11月初旬から中旬(旧暦10月の最初の亥の日)にかけて、子どもと引率の大人が各集落ごとに集合し、集落内の常夜灯を起点に集落内の家々を回る。訪問した家の玄関先をわらを固く束ねた「わら鉄砲」で叩く。その際に、亥の子歌を歌う。また、亥の子が訪れた各家庭ではお金やお菓子を渡す。坂本地区では10月下旬の土曜日に小学生が公民館に集まって、わら鉄砲の作り方の伝承活動を行っている。参加する小学生は坂本小学校の児童で、30人程度が集まり、わらの縛り方などを教わっている。なお、坂本地区では、亥の子行事に縄につないだ石を用いる集落と、わら鉄砲を用いる集落があったが、現在はわら鉄砲に統一されている。また、わらを束ねた亥の子の用具のことを隣の荏原地区などでは「わらボウ」と呼んでいるが、坂本地区ではわら鉄砲と呼んでいるようである。	B
	116	15	輪越し 7月31日 (旧6月30日) 三島神社	東方地区の三島神社では、7月31日に輪越しの祭を行う。これは拝殿に設置された茅の輪を氏子が3度まわり、半年の災いを落とす意味がある。茅の輪は神職が作ったもので、しっかり茅を縮めて作った輪である。また、各氏子に配布した紙の人形(ひながた)に名前を書き、全身をなでて、輪越しの際に神前に供える。	B
	116	8	つづら川集落の秋祭り 10月6日 (10月15日頃) 坂本公民館管内	獅子舞や神輿の渡御といった行事が過疎化の影響により、コロナ禍以前から行われなくなっている。しかし、秋祭りの際の幟立ては現在も続けられており、集落上部にある「鎮神さん」前の幟立石に秋祭り当日、幟が翻っている。なお昔は、集落にある土御門天王社、新田神社の各境内に幟を立てていたが現在は草を刈る程度である。	D
	116	8	坂本地区の秋祭り 10月7日 (10月15日頃) 各神社	坂本地区には、三島神社、大宮八幡神社、龍神社、稲荷神社、春日神社、諏訪神社、素鷲神社があり、各神社で秋祭りが行われている。神輿渡御は御旅所からスタートし、新築の家などに立ち寄る。各組ごとに神輿を渡していくが、「渡す、渡さない」のやり取りを楽しむ向きもある。令和2年は中止し、令和3年は中止したりトラックで巡行した地域もある。獅子舞は特定の家の庭などで行う。なお、素鷲神社は東温市の浮島神社と関係が深く、神輿のお性根は浮島神社で入れる。	B
	116	8	東方三島神社の春祭り 4月第2日曜(4月7日) 三島神社	神輿は出ない。もちまきと神楽奉納が行われる。神楽は、ダイバと神官が木刀を持って舞い、ダイバが小笹を観客に投げる。これは東温市の浮島神社の神楽を招いて行っているものである。もちまきの餅にはくじが入っている。令和2・3年中止。	B
	116	15	土用祈祷 7月31日(7月土用) 公民館分館	7月末に公民館分館に集まり、祈祷を行う。井関地区では大連寺の住職を招いて祈祷する。地区によっては土用汁を作って食べる地域もある。またかつては、虫送りを行っていた地域もあるというが、現在公民館管内で虫送りは行っていない。一方、道旧寺(上野町)では7月に公民館で行う祈祷を虫祈祷と呼ぶ。なお、井関地区では田植えの後、常夜灯に火を入れ竹棒の先に火を付け畦を走り回る虫送りを行っていたという。	B
	116	18	日待ち祈祷 1月4日(大晦日～年頭) 公民館分館	荏原公民館管内で、広く行われている正月の行事。井関地区では、1月4日に公民館分館に地区の人が集まり、氏神の神職を招いてご祈祷を行い、飲食を行う。上野町では公民館分館に道旧寺の僧侶を招いてご祈祷を行っている。コロナ禍により、役員のみ参加になっている。	B
	117	28	みうま(巳午) 12月第一 または第二の巳の日	その年に亡くなった人の正月。ご馳走をして、ご仏前などを包んでいった親戚や隣人・知人を選んで振舞う。僧侶に来てもらい墓参りをする。笹に縄を張りミカンを吊るし、墓地でミカンを撒く。	B
	117	27	いのこ 旧10月最初の亥の日	旧暦の10月最初の亥の日にいのこ餅を食べ、万病除去・子孫繁栄を祈る。小豆飯・醤油飯を炊き、子どもたちが地区の家々で地面を搗いて回る。今でも丁寧な家ではぼた餅などを作る。以前は二番いのこ、三番いのこまで搗いていたという。今では、土のある家が少なくなり、子どもたちも減少している。	B
	117	35	十七夜(折居祭り) 旧6月17日 厳島神社	潮の干満の関係で旧暦の6月17日、広島県宮島の厳島神社の管弦祭の日に行う。管弦船に宮司が乗り神輿を積んで沖を曳航する。以前は、地元青年が權伝馬船で曳航したが機械船が変わった。海岸には赤提灯が吊るされ、船が沖を通過したときに浜で火を焚いた。対岸の高浜地区からの参拝客も多い。	B
117	18	さんがんち 正月	初詣でに和氣比売神社(船越)に参拝。額に「おかんぶす」といって、カボスを半分に切ったもので朱印を神職から押しもらう。泊地区では元旦に小富士山へ登り、神社(大山大権現)の傍で早朝から火を焚いて無病息災を願い、餅を焼いて食べていた。2日には船主や乗組員たちが船霊様にお神酒を供え、煮しめなどを食べて酒を酌み交わす。船頭が舵取りに号令して、舵をトリカジ・オモカジに回して、12の数の金額(例:1,200円、12,000円など)のお金を投げる。	B	

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	117	18	ナズナ節句 1月7日	ナズナを雑煮に入れたり風呂に入れたりした。そして、ナズナをまな板の上に乗せ「火鉢」「杓子」「すりこぎ」「包丁」の4つを持ち、宵に6回、明けに1回、「唐土の島と日本の島と、向かいの山へ飛び渡らんうちに、ナズナ七草カチリカチリ」と言いながら叩いた。	B
	117	35	船越和気比売神社祭礼 10月第1土曜 (10月4日～5日) 船越和気比売神社	船越和気比売神社の秋の祭礼に神輿の海上渡御に供奉して船踊りが演じられる。島の伝承によると「昔、内海にその威を振るった伊予水軍の勇士が、遠く転戦して凱旋することに、戦いの模様を留守の家族に演じてみせたのが、氏神の祭礼行事となり伝承された」という。当日は会場に台船を設けて舞台を作りその上で演じる。演目は「伊予水軍」「大阪城夏の陣」「曽我兄弟」。	A
	118	27	亥の子 亥の月亥の日	亥の月の亥の日に行うが、「亥の日」は2つ以上あるので、順に「1番イノコ」「2番イノコ」と呼んだ。日程は迎える家の側で指定できる。令和3年は対象が1軒で、2番イノコでの開催となった。昭和30年頃までは、イノコはクミウチ(組ウチ=大浦地区内)の全戸を回っていた。小6までの男子が大浦駅に集合し、コドモガシラ(イノコガシラ/イノコダイショウとも)が指揮して家々を回る。当時は70人くらいの子どもが集まった。その後、子どもがいる家だけを回るようになった。昭和34、5年頃から家の前がコンクリ敷きになったことも影響しているかもしれない(コンクリが割れないよう、土入りのカマスやゴザを2つ3つ積んで、その上でイノコを突いた)。また、子どもが減ってからは女子も参加できるようになった。イノコの石は大小2つあり、大きい方は家のカドに飾り、小さい方を突いた。また、子どもが生まれた家では自宅用により小さなイノコ(の石)を作り、イノコが回ってくると家のカドに3つ並べて飾った。昔はカドカドに明かりがなく、提灯と一緒に回った。イノコを突くときは、提灯めがけて高く持ち上げるのが楽しみだった。それで提灯が壊れるので、余分の提灯が必須だった。イノコイワイ(祝い)をする家では子どもの名が入ったイノコバタ(亥の子旗、イノコノボリとも)を立てる。昭和30年頃まではイノコガシラのノボリもあったが、子どもが少なくなってきてイノコガシラのノボリはなくなった。令和3年は、イノコイワイの家(1軒のみ)に残っていた他の子どものイノコバタも立てて飾った。	C
	118	2・8	網代神社秋祭り 体育の日とその前日、 前々日の3日間 網代神社	地区内の網代神社にはだんじりが2台ある。以前は子供1台・大人1台だったが、現在は女性1台・大人1台となっている。	A
	118	10	オエベスさん 10月第2日曜	地区内の「オエベスさん」で、幟を立て注連縄を張って祭を行う。祭の日には横の「踊り場」で相撲を取る。祭自体は今もしているが、相撲はしていない。	C
	118	8	宮島さん・宮島参り 7月19日 センバの鼻のお宮	「センバの鼻」の所に小さなお宮がある。今はしていないが、7月の19日頃に2回、ふんどし姿でお参りし、裸麦で作ったわら船(長さ80cm～1m程度)を流した。宮島(広島県・厳島神社)の祭礼がある日と同じだった。	D
	118	15	大三島さん 8月	年1回、夏に船を借り切って大三島(大山祇神社)に参っていた。帰りに瀬戸田による年もあった。火をもらってきて、わりに火を付けて虫除けにする。今は船を借り切るようなことはせず、本谷の区長が代表でお参りに行っている。	B
	118	2	葛木神社の秋祭り 10月	まず北条・正岡(八反地)の祭礼があり、翌日に浅海、さらにその翌日に小竹でのコマツリになる。小竹地区は浅海の祭礼時、葛木神社にだんじりを出している。	B
	119	18	おはんにゃさん 1月成人の日 猿川集会所・木食庵	集会所に大般若経の入った箱を保管している。おはんにゃさんの日は儀式地区の金蓮寺から僧侶が来て木食庵で経をあげながら、参拝者の体に経本をあてて無病息災を祈る。次に外で、経本の入った箱を持ち上げた下をくぐりさらに無病息災を祈る。その後、もちまきをする。	B
	119	18	お日待ち 1月第3日曜付近 集会所	この日の16時から三島神社で春の祭典があり、宮司が祝詞をあげる。18時からがお日待ち。猿川本村では各組ごとに行われる。上組は猿川上集会所で、河原(こうら)組は猿川下集会所で会食をする。柿谷組は祭典のあと神社でお日待ちの祈祷を行い、北条の市街地に下りて会食をする。	B
	119	8	湯裾地区の祭り 10月第2日曜 三島神社	猿川本村地区、湯裾地区で行う。お神輿が出るが、地区住民減少のため車に乗せて御旅所まで運ぶ。	B
119	28	巳午 12月辰巳の夜 新仏のあった家	新仏のあった家で行われる新仏のためのお正月。かつては辰巳の夜に行われていたが、現在は明るい時間にすることが多い。お墓へ行き、その日についた一白の餅を鎌で切って近親者で墓前で食べきる。そのあと家に戻りあんこ餅の雑煮を食べる。	B	

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	119	18	おかんしゅ 1月1日 庄府地区	朝9時から、地区の人たちが妙見神社お参りし、新年のあいさつをし、皆でお神酒をいただく。	B
	119	23	百一人塚の供養 3月彼岸頃 百一人塚	享保の飢饉で亡くなった人たちの供養のための法要。庵さんのところにある百一人塚のところで、金蓮寺の住職が法要を行う。以前は地区役員が参加していたが、今は住職だけで行っている。	B
	119	19・33	お施餓鬼 8月10日 庵さん	庵さんに精霊棚を作って供養する。	B
	119	19	お通夜 8月17日 庵さん	庵さんのお通夜ということで、地区の人たちが集まり、お念仏をあげる。	B
	119	8	木野山神社の祭り 9月16日 木野山神社	明見神社の境内社、木野山神社のお祭り。祭典を行う。その後敬老会、集会所で会食する。	B
	119	8	明見神社の祭り 10月第2日曜 明見神社	明見神社からお神輿を担いで宮出し、地区各所を回ったあと宮入りする。	B
	119	27	亥の子 11月亥の日 庄府地区	地区の各家を亥の子石をついて回る。20年くらい前までしていた。	D
	119	31	地祝いさん 1月11日 儀式地区	家から近い田んぼか畑で、お正月同様のお飾りをして、おかがみ、お雑煮を供える。40年ほど前までやっていた。今も地祝いさん用のおかがみは用意して家で飾っている。	B
	119	8	おこもり (田上がりのおこもり) 6月終わりの土日 儀式地区	6月の田植えが終わった後、集会所に料理を持ち寄り、会食をしていた。	D
	119	19	お念仏 8月盆 儀式地区	8月16日は馬頭観音さん、8月24日には地藏堂でお念仏をしていた。	B
	119	8	おとき 年2回	下組、清水組、福藪組、谷組の各組ごとに行われていた。当番の家に集まり、念仏や真言を唱えていた。昭和40年代頃なくなった。	D
	119	6	オトウ祭 10月5日～6日 儀式地区	地区の内の6軒が当番となり、集会所に集まって甘酒を作り、地区のみんなに甘酒と簡単な食事を振る舞う。その年の当番から来年の当番へ「オトウ送り」「オトウ渡し」と称して直接食事を渡すことで当番を引き継ぐことを行っている。当番の6軒はカド送りといって、地区の下から上へ順送りに6軒ずつ順番に当たることになっている。以前は、当番の6軒のうちの1軒が宿となり、前日の晩、地区各戸から集めた米を後藤商店で麴にして、70℃くらいで発酵させて甘酒を作り、当日14時ころから皆に振る舞った。1軒の代表者を本客と呼び、お膳を出した。オトウ送りもその年の6軒と来年の6軒が揃い、お膳を出し引き継いでいた。	B
	119	19	まんとう 8月盆 三十三墓	日高城主重見氏の墓、三十三墓のところでおこなう行事。藁で作った1m～1m50cmぐらいの棒を子どもたちに持たせる。子どもたちはそれに火を付け「マントウマントウ」と言って三十三墓のところで行ったり来たり走る。昭和35～40年ころまでやっていた。8月上旬お盆前に三十三墓までの道をきれいにする道づくりは今も行っている。道づくりのあとお参りしている。	B
	119	19	河原念仏 8月14日 中村地区	日高城での合戦に関わった人々への供養念仏。上側と下側から二手に分かれて出発し、立岩川の橋の30mくらい上流側で出会い、念仏を始める。念仏が終わると精霊棚の竹を折り、川へ流す。	B
119	18	初祈祷 1月9日 猿川原地区	午前中、地区の貫之神社用の注連縄作り。2022年は7人で作成。午後1時から祭典。	B	

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	119	25	弓祈祷 1月6日 (1月5日～6日) 猪木地区	「お役者さん」と呼ばれる2人の射手は、元々は猪木在住者（猪木と枝村の大本から）から選出されていたが、戸数が減り、猪木地区に住所のある人か地区の出身者やその子孫で、前年身内に不幸のなかった成人男子から選定されるようになった。以前は射手は5日の夕刻から地区の会堂に籠って精進し、6日の午後行事が終わるまで帰宅しなかった。その間の食事の世話は頭屋が行った(女人禁制の行事である)。頭屋は、行事を取り仕切る世話人であり、区長などが担っていた。的は2つ、大的と小的を作成する。竹で輪を作り、紙を貼り、×を書く。書くのは藤の枝の枝先を割いたものを筆とし、茄子の木を焼いた炭を使用していた。6日の朝、川で体を清めて、餅6個入りの雑煮を食べる。試し打ちとして「小的(コマト 直径1m)」に1人18本の矢を射る。本番の「大的(オオマト)」を射る時は着物の片袖を脱いで行う。本番では大的に6本を2回、小的に6本の矢を2回射る。さらに、餅6個、3合のかけ飯を食べる。頭屋はお役者さんが弓を射ている間に河内神社へ参拝し、ヤカズ(矢数、矢の本数分(108本)の萱の枝を短く切って束ねたもの)を供える。令和3年はコロナの影響で中止、令和4年、猪木地区の2軒で話し合い、猪木の出身者の人たちに通達する形で今後の行事の中止を決定した。	D
	119	2・9	国津比古命神社例祭 (風早火事祭り) 10月日	国津比古命神社、櫛玉比売神社の氏子にあたる北条校区、難波校区、正岡校区の秋祭り。各地区のダンジリが練り歩き、統一練りも行われる。ダンジリは四本柱に無数の日の丸の飾りを付けた竹笹を立て、中央に大きな提灯を据えて、半鐘を激しく鳴らして練り歩く。神輿の先導役としてダイバが登場する。昔、御神体が洪水で流された際に海で見つけたのが猪木地区の者だったと伝わり、猪木地区の者やその出身者等がダイバを務める。獅子舞も奉納される。〔詳細調査報告9参照〕	A
	119	8	縄宮さん 4月4日 滝本	縄宮さんのお祭り。もちまきなどしていた。	D
	119	8	おみろくさん 8月1日 滝本地区・弥勒堂	おみろくさんの縁日。弥勒堂にて行われていた。前日から開帳し、当日は金蓮寺さんが来て法要があった。芝居もあり、露店も3店ぐらい並び昭和末ころまで賑やかに行われていた。今も御開帳はしているので、お参りする人はあるとのこと。	B
	120	18	お般若 1月	大般若経をおさめた長持の下をくぐってお参りする。大般若経をおさめた長持をくぐる行為を行うことで、大般若経を六百巻詠んだことと同じであるとみなされる。これは大般若経を取めた長持をくぐることで無病息災のご利益になると考えられている。例年は、担い棒をつけた長持をもって地区の家々を回り「お般若さんが来ましたよ」と声をかけるが、令和5年のお般若さんは経典を取めた長持を集会所へ持ってきて、地域住民が集会所に来てもらった。経典は浜町地区の養護院で保管されており、三穂町・鹿島・新玉地区がその経典を使う。	B
	120	2・9・35	鹿島の権練り (鹿島神社春季大祭) 5月3日 鹿島神社 鹿島権練保存会・鹿青会	神輿を乗せた御船による「権練り踊り」が行われる。神輿を先供する船は権伝馬と呼ばれ、伝馬船を2隻横につなぎ合わせたもので、船上で権練り踊りを披露しながら、御船を引くような形で海上を進んでいく。権伝馬は、提灯や幟、数多くの日の丸小旗などで飾り付けられている。飾り立てた権伝馬の船上での、鐘と太鼓に合わせたボンテンや剣権の踊りと御船を転覆させればかりに揺らし続ける海上練りが披露される。(県)〔詳細調査報告55参照〕	B
	120	8	大注連縄張替え 5月15日(5月4日) 鹿島 北条鹿島まつり実行委員会	海上安全や五穀豊穡を祈願して鹿島沖の玉理・寒戸島にかかる大注連縄を張り替える行事。令和2年、3年は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため2年連続中止、令和2年度に大注連縄の取り外しのみ行っており、以降2年間大注連縄はかかっていた。令和4年度は日時を変更して3年ぶりの張替えを行った。8時からJAえひめ中北条選果場で大注連縄を制作。13時から鹿島龍神社で神事後、船で大注連縄を玉理・寒戸島へ搬送、足場の悪い場所で命綱をつけてはしごを使い張り替える。	B
	120	8	お日待ち・おこもり 7月第2月曜 (松山市民大清掃の日)	土手内地区では、午前中に松山市民大清掃で地区の清掃を行う。12時から鹿島神社でお祓いし、お札をもらう。参加者は区長や三役、各家から一人ずつ程度。鹿島神社のお札はA4サイズの縦半分にしたくらいの大さきで、区に4枚と各家にもらう。区の入入口(家・ガードレール)に貼る。区の窓、区の端の場所に古いお札と入れ替えて貼る。終了後地区の集会所に集まる。	B

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	120	15	ナゴシ(夏越し) 7月最終土曜日 鹿島神社 鹿青会	夏越しは、一年の半分が過ぎる6月の末に罪や穢れを祓い、残りの半年間の無病息災を祈る行事。準備は鹿青会が浅海地区へ茅を刈りにいき、軽トラック一台分くらいを運んできて、茅の輪を作成する。茅の輪をくぐるほかに、半紙で作られた人形(ヒトガタ)を体に撫でつけて鹿島神社におさめる。当日は鹿青会が出店などを出す。	B
	120	8	赤大師縁日 8月20日 赤大師(松山市北条辻)	北条28区内の内、5地区(新開1,2,3,各区、南町、新開団地)主催による「赤大師縁日行事」が毎年8月20日に執り行われる。朝8時頃より赤大師(赤地藏)の境内の清掃から始まり、子供相撲の土俵づくり等の準備を行い、午後より住職によるお念仏、子供相撲、夕方からは盆踊り大会と夜9時すぎまで行われる。5地区約480戸余(組員数)地域限定の行事。赤地藏に願いをかけ、叶ったらお礼にペンガラで赤く塗ったことから赤地藏と呼ばれ、赤く塗られた大師像もある。	B
	120	2・9	鹿島神社の秋祭り 10月9日～10日 鹿島神社 鹿青会・鹿島権練保存会	旧北条市の秋祭りは鹿島神社と国津比古命神社(正岡地区)を中心として「北条火事祭り」と称される。数十台も出る「だんじり」と呼ばれる山車に、半鐘が吊るされており、それをカンカン鳴らす音に由来する。10日の3時から御旅所で神迎え屋台総練。宮出し神事後、庚申車を先頭に神輿が御旅所前を走りながら3往復する。例年は担いで神輿渡御をしていたが、令和4年度は神輿をトラックに乗せて地区内を巡幸。上辻区(柳神社)・三町区(集会所)・鹿島町区・辻町区(集会所)・新町区(三徳神社)では神事も行う。15時30分ごろ、明星川に神輿を投げ込みみそぎをし、鹿島神社御旅所で御霊移しをして終了。	B
	120	27	亥の子 11月亥の日 土手内地区	前日の10日16時より17時過ぎまで、その年に誕生した子どもの家(ヤド)にイノコをまつり、幟(イノコバタ)をたてる。昔は男児のみであったが今は男女どちらも対象であり、令和3年は1人。該当する子どもが複数いる年は、一番イノコ、二番イノコを行うが、近年はあまりない。イノコは11日15:30まで飾りその後撤去。11日18時に子ども達が集会所に集合し、18:10ヤドに到着。ヤドでは、イノコをつかないとお祝にならないため、雨が降ってもつく。土手内地区は約100軒の家があり、最初にヤドでイノコをついたあと、北組と南組で二手に分かれる。(岡田皮膚科のあたりで区分)小学1年生から中学校3年生までだが、幼児も保護者と参加している。令和3年度は地区内で対象者は15名で当日は13名参加。ここ2年程子どもの数が少なくなった。年長者は中学三年生で呼称は「オモ」「オモダイショウ」。「土手内 いのこ」と文字の入った提灯を竹竿の先につけ、持つのは中学校三年生。道路を渡る際の交通整理も行うため大人が行ってもよい。南組は18:20頃ヤドを出発し、41軒でイノコをついたあとヤドに戻ったのが19:46。愛護班の保護者や大人が、この家をつくかどうか、どこをつくかどうかを判断し、イノコをつく。地面がコンクリートの家は、小さなタイヤ(タワラと呼称)を置いて「小さく」つく。事前に祝儀を渡している家もあるが、イノコが終わると家人が出てきて、お酒をかけたり祝儀を渡して「来てくれたん。ありがと」とお礼を述べ子どもたちもお礼をいう。〔詳細調査報告46参照〕	B
	120	28	みんな 12月巳の日 墓地	みんなとは、12月の巳の日に、その年に亡くなった人のための正月を祝う行事とされる。夕方、日が暮れてから、親族12人程度でお墓に行き、藁で餅を焼き、4～5人で手で引っ張って分けて食べる。その行為を何回かに分かれて行う。服装は喪服。その後自宅に戻り皆で食事をとる。	B
	121	19	うら盆 8月	善応寺地区では、善応寺にかなり大きな数珠があるが、寺院から大きな数珠と鐘を各組の組長さんが借りて持って帰って、各家に回すという風習がある。	B
	121	8	河野地区秋祭り 体育の日を含む4日間	令和4年は、10月9日～12日に開催。9日には氏神の高縄神社で神事。善応寺地区では江戸時代末期から続く子どもの集落の道を回る提灯行列を行う。10日は宵祭り、善応寺地区では提灯行列を行うが、各家庭を1戸1戸回る。その際各家庭の玄関を「回れ、回れ」と掛け声をしながらぐるっと回る。そして最後に氏神である高縄神社に行き終わる。近年(15年前くらいから)では10日の晩に河野地区や粟井地区のだんじりがパルティ・フジ夏目に集まって、かきくらべを行っている。11日は大祭りで高縄神社の神輿渡御が行われる。その際、宮出しの際に各地区のだんじりが集まって宮出しをさせないようにし、夕方に宮入の際にまただんじりが集まって、宮入をさせないようにする。以前は大きな神輿が2基あった。現在は1基であるが、9日に総代と神社の宮司で祭典、10日の夜にお御霊移しを行い、11日に総代と協議員が高縄神社に集まり、神輿渡御が始まる。その際、小さなお社が4つあって神輿と一緒に各地区を回る。また善応寺地区のお供獅子も一緒に回る。各地区に村社があるので、各神社で祭典を行う。ただし、毎回神輿が回る順番は、柳原→(中須賀、片山、夏目のうち年ごとに1か所)→(佐古、高山、横谷のうち年ごとに1か所)→善応寺→別府の順番になっている。12日は小祭りといって各地区の神社で集落ごとの祭りがある。各地区ごとに神輿が出る。善応寺地区などでは小祭りの際はだんじりは1日までで、だんじりを出さずに神輿だけと決めている。コロナ禍により、令和2年・3年は中止。	B

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	121	18	お般若さま(大般若) 1月20日頃	大般若経の入った箱を、昔は担いで集落を巡回し、辻々で鐘を鳴らして住民を集め、住民は箱の下をくぐって年間の無病息災を祈願した。現在はトラックに箱を積んで、角々で鐘を鳴らして人を集める。大般若経櫃をおろして二人で担いで、その下を人がくぐる。	B
	121	27	亥の子 旧10月亥の日	男の子が生まれたところが宿としてお祝いしてくれる。その年の一番最初に生まれた男の子のところが、1番亥の子となる。近年では女の子も同様に祝うようになった。昔は亥の子宿が子どもたちにご馳走をふるまうという風習があった。	B
	121	8	おこもり	善応寺地区に残る地区の行事で、組ごとに行く。組長さんの家に集まって、組によっては集会所に集まって、神主を呼んで神事を行い、五穀豊穡を祈願し、神事のあと、会食を行う。最近では飲食店に食べに行くところも多い。日程は組長が予定を調整して決定。組によってはしないところも出てきたり、集会所で合同で行うところなども増えてきた。	B
	121	18	お日待ち(お月待ち) 1月10日前後	組ごとに行く。神主が来て、五穀豊穡や家内安全、組内の安泰などを祈願し、直会もかねて飲食を行う。善応寺地区では12、13戸からなる組が15組あるが、宮司がきてやるところと、辻ノ内地区のように僧侶が来てやるところがある。僧侶が来てやるところは、お月待ちとよぶ。日程は組長が予定を聞いて決定する。最近では家でやらずに、集会所に集まって神事を行うということが多くなっている。	B
	121	15	虫祈祷 夏の土用	地区の役員が寺院に集まり、病害虫が出ないように祈祷をする。その後、集会所等で和尚にも来てもらって会食、「おとぎ」をする。昔は笹に僧侶の書いた祈祷札を結びつけ、それをため池まで持って行って流していたが、現在はしていない。	B
	121	19	お施餓鬼 8月21日	善応寺地区では檀家が中心で施餓鬼法要を行う。宗派の僧侶が10人以上来て法要を行う。地区の役員と、その年に亡くなった新仏の親族と熱心な檀家が参加する。	B
	122	18	お日待ち 1月10日前後	集会所に住職や太夫を迎えて、家内安全・無病息災を祈る。常竹地区では10年くらい前までは夜の7時頃に集まり、祈祷のあと、食事をして、明るく日の太陽が昇るまで集会所におり、太陽が出るとみんなで家内安全・無病息災を祈るということをしてきた。20年くらいまででも10人程度しか集まらなくなっていたが、だんだんと人数が減り、現在では行事を行うが、朝までやるということはなくなっていた。新型コロナウイルス感染症の影響により、ここ2年は行っていない。河原地区でも同様で、集会所で形だけ役員が集まるという形になっている。	B
	122	27	亥の子 11月亥の日 (旧10月の亥の日)	旧暦10月の亥の日の晩に子どもが家々を回って歌に合わせて亥の子石をつく。亥の子歌には「松づくし」「大黒様」「弟んや」「鶯や」「宝船」「豆づくし」「立つづくし」などがある。現在では子どもも少なくなり、家も土の庭がないところが多いので、座布団を持って行って座布団をついたり、亥の子石を宙に浮かせたまま歌ったりするところも多い。亥の子歌も早く終わらせるために、途中までで終わらせることが多い。	B
	122	2	粟井地区の秋祭り 体育の日を含む三連休 (10月9日～12日)	10月9日～12日に秋祭りが行われていたが、現在では体育の日を含む3連休で行っており、日が変わる。以前の日程であれば、9日に宵宮、10日に神楽、11日に練り、12日に小祭りという日程。神楽の日には宇佐八幡神社で浦安の舞が巫女によって奉納される。常竹地区では神輿とだんじりがある。昔はだんじりがなかったのが、北条地区の影響もあり、若い人はだんじりをかきたいということで用意された。現在では両方を運行するのは大変なので、だんじりの日と神輿の日が分けられている。11日には宮出しがあり、その日は神輿が中心である。小川地区、河原地区、西谷地区、麓地区には獅子舞があり、農業の様子や作物を荒らすイノシシやそれを退治する猟師の姿が描かれていたが、現在では小川と河原にしか残っていない。粟井では地域全体で秋祭りが行われるのではなく、地区ごとに宇佐八幡や三島神社の氏子となっており、それぞれの神社を中心に秋祭りが行われる。以前は9日にのぼり立て、13日にのぼり倒しが行われ、集落の入り口などさまざまな所にのぼりとちょうちんが立てられていたが、現在では御旅所などの限られた場所のみとなり、少なくなった。また、祭りの最終日にはすでにのぼりを倒すところがほとんどとなった。	B
	122	18	大般若 1月10日前後	お日待ちの次の日には大般若が行われた。大般若経を積んだ神輿のようなものを集落の中を運び、住民はその下をくぐって、箱で頭をたたいてもらおうと御利益があると言われて叩いてもらっていた。ここ10年くらいはやっていない。	D
122	31	地祝い 1月11日	常竹地区では8年ほど前まで、ウラジロを土に埋め、米をお供えて農作を祈願する地祝いをすべての水田に対して行っている家があった。ただ、その方がなくなって以降、行事を行っている人はいないのではないかと。	D	

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	122	10	山の神相撲 8月31日 大西谷目魯止神社	大西谷地区の目魯止神社で農作業の完成と豊作を祝い、子どもの成長を祈念するために行われる。目魯止神社の相撲は江戸時代からはじまり、昔は女相撲も行われていた。現在では8月31日に小学生による奉納相撲が行われている。	B
	123	7	お伊勢宿の遷宮行事 2月頃 中島大浦の宿主宅	伊勢神宮から分社されたご神体の遷宮を行い、遷宮先の家で、ご神体を守り、信者等の参拝も受ける。遷宮行事の参加者は宮司、大浦地区総代、旧宿主、新宿主で、忽那島八幡宮宮司による祓いの神事後、夕方5時30分頃、旧宿主宅へ迎えに出発。夕方5時40分頃、旧宿主宅に到着し、旧宿主宅にて、遷宮の神事を行う。完全に日が暮れた後、ご神体を箱に入れ、行列を組んで、新宿主宅へ向かう。配列の順番は、宮司、大浦地区総代、旧宿主、新宿主の順。神社総代(氏子代表)は、新宿主宅で出迎える。新宿主宅にご神体が到着したら、新たに祭壇を設け、受け入れの神事を行う。その後、直会を行う。直会の参加者は、宮司、大浦地区総代、新宿主やその親族等。お伊勢宿の宿主は、ほぼ毎日、海の潮(満ち潮に限る)を汲んで、神前に供え、供物や榊が古くなっていれば、新しい物に取り替える。また、参拝者が来れば対応する。旧中島町の区域でお伊勢宿の行事が残っているのは、中島大浦地区のみで、言い伝えでは、昔は、一般庶民は伊勢神宮に参拝することが難しかったので、室町時代頃に、伊勢神宮からご神体を分社してもらい、島民も気軽に参拝できるようにしたといわれている。	B
	123	10	かいびやく様(関白様) 4月初めの日曜 長隆寺・興理家神社	平安時代後半に忽那島(中島)を開発したとされる藤原親賢および藤原一門で最も栄華を極めた藤原道長の功績を称え、中島大浦の長隆寺と小浜の興理家神社の境内で、奉納子供相撲が行われる。勝者には景品などが与えられる。	B
	123	19	小浜地区の盆行事 8月15日 小浜の埋め立て地道具踊り伝承の会	道具踊り・太刀踊りと呼ばれる、男性は太刀、女性は鎖鎌又は薙刀で、男女向かい合い戦うような素振りです踊る盆踊りが行われる。以前の音頭(口説き)は「志賀団七」であったかもしれないが、昭和40年頃からは、江戸時代初期(慶長10年)に、小浜で実際にあった農民騒動(一つ免事件)の犠牲者大塚様(小浜村庄屋で、悪代官に斬殺された)とその仇討ちをした遺族を称える内容の音頭(口説き)で踊られている。いつの頃からか盆踊りでは踊られなくなり、各種の観光イベント等で踊られた他、昭和45年から松山北高校中島分校の運動会で踊られるようになった。中島東小学校廃校後も、中島小学校5・6年生に引き継がれている。さらに、平成20年頃から、小浜地区で「道具踊り伝承の会」が結成され、再び小浜地区の盆踊りで踊られるようになった。(市)	B
	124	30	宇和間天満神社の秋祭り 10月17日に近い 土・日曜・祝日 (10月17日) 宇和間天満神社	宇和間天満神社の秋祭りの宮出しの際、しめきり(鼻高)・猿(お面)・狐(お面)・弓持ち・挟箱・大傘・小傘・大鳥毛・馬印・毛奴・投槍などの順で、行列を組んで御旅所に向かう。この間に、毛槍・投槍の投げ渡しが行われる。そして、奴行列の後に続いて神輿が御旅所に向かう。午後の宮入りの際には、着ていた法被を裏返し、赤襦袢になって神社に帰る。この宇和間の奴振りは、平安時代に左遷され九州の大宰府に向かう菅原道真が宇和間に立ち寄った際に、住民が菅原道真をなぐさめる為に行ったのが始まりと伝えられている。この奴振りに参加できるのは、かつては長男に限定され、参加年齢も20歳程度までと限定されていた。しかし、少子化にともない、次男なども参加できるようになり、現在は女の子も参加しており、行列も次第に簡素化されつつある。また、昭和50年頃までは、神社本来の祭礼日である10月17日に行われていたが、子どもの参加が不可欠であるため、現在は、神社の本来の祭礼日に近い土日祝日にお祭りの奴振りも行われている。(市)	B
	124	19	粟井地区の盆行事 8月15日 粟井教園寺境内 及び忠霊塔広場	菩提踊りと呼ばれる、中島粟井地区独特の供養踊りが行われる。盆踊りとは別の物で、その年の神仏(原則として、前年のお盆から当年のお盆までの間に亡くなった人)の関係者のみを対象として、新仏の数プラス1(お寺の分とのこと)の数だけ粟井教園寺の境内と地区内の忠霊塔広場で踊り、その後、地区内の広場にその他の者も集まって、普通の盆踊りが行われる。平成10年頃までは、新仏の家々を踊り手が巡回して、菩提踊りを踊っていたそうであるが、現在は新仏一体につき何分と時間を決めて、お寺の境内と忠霊塔広場で踊られている。 〈例〉新仏一体につき5分で、新仏2体なら2体分10分、お寺分5分で、計15分間踊る。	B

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	125	15	夏越祭り・輪くぐり (折居祭り) 6月30日 厳島神社・天満神社	元怒和では「輪くぐり」という。篠で作った輪を厳島神社の神前に備えつけ、この輪を三回くぐる。この輪くぐりの由来については、「前夜、人形をかたどった紙の絵を各人が床の下に敷いて寝たものを輪くぐりの際、懐に入れ三回くぐった後、神社の用意した容器に納めると一年間厄除ができ、神のご加護により幸せになる」といわれる。上怒和では「夏越祭り」という。夕方、天満神社に参拝し、神社から各家庭に配られた「雛形」に生まれた年を記入して、前夜に家で寝敷きしたものを神社へ持って行き、無病安全を祈願してお礼を受ける。	B
	125	8	怒和の秋祭り 10月11日、12日 若宮八幡神社、天満神社	宮浦では11日、上怒和では12日に行われる。獅子舞が出るが、大きい獅子頭と胴を二人で操作する獅子舞で、雄獅子と雌獅子が太鼓だけの鳴り物で舞う。江戸時代末期に島の宮脇家の先祖が、伊予郡の郡中方面から伝えたといわれている。宮出しは雄獅子を使い、お旅所で雌獅子を使う。雄獅子は①狐が獅子に戯れる ②ストココトン(獅子だけ) ③トンカトンカ ④いも掘り ⑤トントンチキ(獅子の昼寝) ⑥狩人(狩人が陣笠をかぶり、鉄砲に梵天を持って出る。狐が出て遊ぶ)。雌獅子は①ドバチキ(獅子の牙磨き) ②トンテントン(野荒らし) ③いも掘り ④尻かぶり ⑤寝る ⑥狩人 ⑦サッサ ⑧おやじ(孫と猿)の流れである。(市)	D
	125	18	元怒和 ・上怒和の正月行事 1月1日～15日	元怒和では、2日は乗り初めの日で、船霊様にお神酒を供え、一年の無事、安泰を祈る。午後、農作業の仕事始めとして簡単な鞆使いなどを行い豊作の一年を祈る。5日には「福わかし」といって、正月の間にお供えしたご飯を雑炊にして食べると福が授かるという。上怒和では、7日を七草祭り、なずな節句ともいう。ナズナを水洗いして前夜に神棚へお供えし、翌朝、なずな粥を雑煮に入れて、なずな雑煮として食べる。夕方にはナズナを入れて風呂に入る。	B
	125	19	元怒和の盆行事 8月14日～16日	元怒和では、14日から16日まで三日間盆踊りをしてきたが現在は15日のみ。14日と15日は「供養踊り」といわれ、一般の人が踊っている中に新仏の関係者が入り反対の方向(右回り)へ踊る。そうすると一般の人は踊りの列から抜け出して30分くらい待つ。新仏の家の跡取りの嫁は遺影、供物、位牌、鈴の入った箱を背負い、家族のものも加わり白い着物に黒い帯を身に付けて踊る。このあと、新仏の家では一般の人々に冷たい飲み物などを振舞い踊りを盛り上げる。16日は、施餓鬼踊りといわれ、一般の死者に対する供養踊りが行われる。この日は団子を作り仏壇にお供えして住職を招いて経をあげてもらふ。また、亡くなった人の家が共同で長さ約2mの藁で編んだ舟を作り、人形を乗せて紙の帆を立てて沖の弁天小島から流した。この舟は靈魂丸という。昔、靈魂丸に団子、ご飯、野菜を忘れて舟を出したところ、舟は沖を走らずすぐに浜に帰ってきたという。盆踊りの種類は2種類。普通の踊り方を「キソン」、難しい方を「ヨツボシ」という。	B
	125	19・33	上怒和の盆行事 8月13日～24日	上怒和では、先祖の霊を祀る行事は宗派によって異なるが、禅宗では庭先に精霊棚を作り13日から24日の盂蘭盆まで祀る。踊りは8月14日～17日の4日間。14日、15日は供養踊りを行う。神仏の家では家族のものが箱に位牌、写真を入れて背負い、その後を親類の者が続いて踊る。服装は白の着物を着て黒い帯を締める。16日は施餓鬼供養で一般の死者に対する供養踊りだった。17日は観音様の前で踊る。踊り方には、「キソン」「キヤマ」「アゲウタ」の三様があり、節・太鼓・囃子・踊りがそれぞれ異なる。	A
	125	30	若宮八幡神社 ・厳島神社祭礼 10月11日、12日 若宮八幡神社、厳島神社	宮浦の若宮八幡神社では11日、元怒和の厳島神社では12日に行われる。明治7年(1874)厳島神社の大修理と神輿の造り替えがあり、藩政時代の参勤交代の大名行列を模した奴行列が始まったという。九州方面より伝わったものといわれる。「稚児やっこ」といい、かつては7歳から12歳までの長男に限られていた。奴褌に手甲・脚絆・わらじ履きの衣装に身を固める。音頭をとる中、行列の順序は「露払い(笹を持っていった)」「鉄砲」「弓」「鉄箱」「大鳥毛」「馬印」「長槍」「毛槍」「白黒台笠」「投げ奴」。現在は鉄箱が先頭で、露払い、鉄砲、弓は無く、人数の減少で持ち物も少なくなった。	D
	126	19	津和地の盆行事 8月14日～15日 (旧7月13日～16日)	13日に奥の間にある仏様を座敷に出し、精霊をお迎える灯籠を夜から灯す。14日には、朝から墓参りをする。小さい笹の先へ施餓鬼をつけ、しきび、団子、水桶をもった墓参りの一団が次から次へと続く朝である。この夜から盆踊りが始まる。翌15日は前日に続き盆踊り。海で遭難した人の霊を慰めるために浜辺で焚き火をして線香をあげて霊を迎える。16日はお盆の最終日。家庭では仏様に送り団子をお供え、一家そろってお寺参りをする。寺の庭で最終の盆踊りが行われる。	B

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	126	18	津和地の正月行事 1月1日～15日	元日の朝、主人は晴れ着に着替えて若水を汲み氏神様にお参りする。女性の早起きは禁物で、前夜女房の用意していた材料で初詣から帰った主人が雑煮を焚き、神様にお供えをして1年間の家内安全と五穀豊穡を祈る。元旦早々の男の子の来訪は縁起がよいということで祝儀袋にお年玉を入れて渡した。そして、本来は「飲酒」の言葉が「かんし」に変わったと思われるが、隣近所や親類を招いて朝酒をかたむけながら歓談する。正月2日は仕事始めの日で、家の主人は朝のうちに簡単な手仕事を、女房は洗濯物の洗い始めをした。正月3日は正月三が日の最終日。漁師が蛭子様をお祭りする日。神職を招きお祓いを上げ、今年の大漁を祈念した後、祝い酒をあげる。正月7日はナツナ節句。昨晚、まな板の上でん木、大根、なづな、火箸、杓子、包丁をそろえて祀り、雑煮を炊いて神仏に供える。この夜は風呂にナツナを入れる。正月15日は小正月。とんどばやしの日で、正月の門松やお飾り、古いお守り、御神札などを「とんどをはやす」火で燃やし、この火でお供えしていた鏡餅を焼く。これを食べると夏病みをせずに過ごせると言われていた。正月16日は「やいとほこり」の日。婚期前の15～20歳までの青年男女は、だんじり宿に集まり灸をすえていた。この集いは各自砂糖をまぶしたアラレを持ち寄り歓談しながら灸をすえあい時間を過ごした。若い男女がおおやけに交流できる一日だった。	B
	126	18	並び正月 2月1日 津和地集落の該当する家	女性33歳、男子41歳、男女61歳は人生の厄年といわれ、この年に当たる人は、早朝、晴れ着姿で氏神様にお参りしてお祓いを受ける。午後は親類、近所、友人などを招いて厄逃れの祝いをする日である。	B
	126	28	巳午正月 (みんなしょうがつ) 12月最初の巳の日 津和地集落の該当する家	暦にでている12月はじめの巳と午の日を、巳午正月と呼び、過去1年間に亡くなられた人の正月と位置づけ、注連縄を墓碑に飾り、餅を供えて墓参りをする日である。	B
	126	2	津和地の秋祭り 10月の日曜 津和地島集落	島内に東組・中村組・上南組・南組の4体のだんじりがある。着飾った少年少女が4、5人ずつ乗り、太鼓を鳴らしながら地区内を練り歩く。精巧な彫刻が施されただんじりと、子どもたちのお囃子とが祭りに華やかな彩を添えている。以前は、津和地の喧嘩祭りといわれ、夕刻ともなると集落中央の広場でだんじり同士の勇壮なぶつかりあいが見られた。津和地の喧嘩祭りとしてその名が知られたが、今では広場もなくなり荒っぽさは消え、往時を偲ぶことはできない。広島県倉橋島のだんじりをモデルに、明治時代初期に作られたと伝えられており、龍や鶴などの精巧な彫刻が施されている。同じ形のだんじりは、瀬戸内地方に3箇所しか残っていないという。	B
	127	18	二神島の正月行事 1月1日～15日	昭和の終わりくらいまでは旧正月で行っていた。12月13日に笹で煤をはらい、25日から28日の間に餅つきをした(29日は苦がつくので餅つきはしなかった)。餅は家の神様(床の間、水神様、荒神様、地主様、蛭子様など)、船神様等に供え門松を立てた。門松は門の両側に竹筒をつけ梅、松葉を入れる。松葉には混ぜ寿司ご飯を乗せる。お飾りは自分の家で作った。元旦に家の主人が潮水を汲んできて南天の葉で庭の神様にふりかけた。旧正月では大潮なので、夜が明けたら「どうの口があく」といって砂浜へ行った。1日はお宮参りをした。正月3が日は畑仕事も海も休んでのんびりとした。兄弟分が家にきて「おかんしせんか」(酒を飲もう)といってお酒を飲んだ。2日は心安い家に行き、妙見様とお寺に参った。3日は女性は他所へ行くものではないと言われていて女性が来るのを嫌った。神様へのお供えは、おおつごもり(31日)には、カワラケにご飯とおかず(大根、レンコン、豆腐、昆布の煮物など)を供え、元旦にはオシキにお神酒と小さい餅で雑煮を作り、イリコとほうれん草等の入ったおつゆを供えた。身内が亡くなっていたら正月は祝わなかった。14日か15日の朝、正月のお飾りを浜で焼き、餅を焼いて食べた(現在は燃やさず可燃ごみなどで処分する)。	B
127	27	オイノコ様 11月最初の亥の日	タナアジ(タナアゼ、アゼ、山の向こうの方)からオイノコ様が帰ってくる。この日は午前中に菊の花を二色飾る。前日に餅を撒いて(白い餅と蓬餅、中に小豆を入れる)、お供えをして翌日の午後に下げる。オイノコ様は4月の節句にタナアゼに帰ると言われている。子どもたちは家を回り、石に紐をつけ地面を叩きながら「イノコ、イノコ、イノコモチツイテ、ツカンカッタラ…」と歌ってお金をいただいた。関連行事で、大般若経を担いで各家をまわった。大般若経の下をくぐるといいことがあるといわれていた。	D	

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	127	19・33	二神島のお盆 8月13日～14日	13日は迎え盆で、午前中に墓へ参る。迎え火を焚き、精霊棚を作る。精霊棚は折敷を柱に据え付けた。オガラやそうめん、桐の葉を敷いてダンゴ、青梅、栗の穂などを置く。島に住職がいるときは各家をまわり経をあげてくれた。住職は回向袋を置いていくので、盆が済んだらその袋に小豆とかササゲを2、3合入れてお寺に持って行った。14日は合同慰霊祭。お盆は新仏の供養であるから、集落内に祭壇を作り合同で慰霊祭を行う。そのあと盆踊り(精霊踊り)をする。かつては黒の羽織袴で、亡くなった人の帯を褌がけにして、位牌を背負って踊った。踊りの途中で休憩してハナ(お布施)の披露が行われ、踊りを再開する。昔は、近くの島の太鼓の音が聞こえる間は、お互いが止めるまで続け、明け方に踊りを終えたころがあった。15日は送りで、日が翳ってから墓に行き、六地藏の前でオガラの周りに松の木の古いのを小さくしたものを27本くり、それを4本作り(全部で108本にする)焚いた。精霊棚に上げたものは、桐の葉に包んで海に流した(今は流さない)。	B
	127	18	二月入り (厄払い・還暦祝い) 2月1日(旧2月1日) 二神集落の該当する家	女性33歳、男性42歳、男女60歳の祝い。該当者は2月1日に宴席を設け、餅を撒いて親類、隣近所や以前に餅をもらった家にお返しで配る。この歳に当たる人たちは、神社にお参りし、帰りがけに鳥居をくぐる前に歳の数だけお金を撒いて帰る。例えば10円玉を33枚、50円玉を42枚、100円玉を60枚のように。かつては、集落の人たちがこのお金を拾った。ただ、このお金はすぐ家に持ち帰ってはだめで、使ったか、家の郵便受けなどに入れておき翌日以降に使った。	B
	127	28	ミンマ(巳午) 12月最初の巳の日 二神集落の該当する家	年内に新仏のあった家は12月の最初の巳の日に墓に参る。二神島では巳の日ではなく前日の辰の日の夜に行く。親類や隣近所が集まり餅を撒く。この日は撒いた餅をすぐに焼いて食べる(普段は搗きたての餅を焼いて食べない)。夜の零時を過ぎた頃にみんなで墓に参る。このとき他の家の人たちとすれ違っても挨拶は交わさない(普段はきちんと挨拶をする)。墓に行く前に六地藏の前で寿司桶に入れた一升餅を包丁の先で切り取り、肩越しに参加者に渡す(普段包丁の先で物を渡すものではないとされる)。その後墓に参り帰る。〔詳細調査報告48参照〕	B
	127	35	宇佐八幡神社の秋祭り 10月の日曜 (旧9月25日～26日) 二神島集落	船踊りが奉納される。舟の舳と鱧に剣権をもつ青年が立ち、胴の間には梵天を持つ少年数十人が、あでやかな長じゅばんに褌がけ、腕抜きをし、鉢巻姿で伊勢音頭などに合わせて踊る。音頭には「伊勢音頭」「ほーらん音頭」「ほうえや音頭」の3種類ある。神輿の海上渡御に供奉し、漕ぎ船・権船・神輿船・踊り船の順序で港を出て沖合を時計回りに3周する。昭和62年(1987)からは陸上に船の模型を作り踊るようになった(船の不足と踊り手の減少・低年齢化によるもの)。起源については、明治13年(1880)ころ、興居島の船踊りの剣権踊り・梵天踊りを習ってきて、二神風アレンジして翌年から踊り始めたことされる。怒和島には獅子舞・稚児やっこ、津和地島にはだんじりや漕ぎ船競争が行われていて、秋祭りを賑やかにするため村役が相談して取り入れたという。当時、祭りの日は、二神島では島を上げて毎年由利島周辺で操業していたイワシ網漁が終わった旧暦9月25、26日の両日だった。踊り子のいなくなった平成22年(2010)ころから陸上での船踊りも実施していない。神輿渡御では、新築をした家の座敷などに集落の東側から順番に神輿を入れた。(市)	D
	128	1	どんど焼き 1月15日	使用後の正月飾りを集めて焼く。焼いた後の灰を家の周りにまくと良いとされる。	B
	128	18	ひゃくなんびょう (百南無瓢) 旧1月16日	女性たちが寺に集まり行う。大数珠を左へ3回、右へ3回繰る。大きい珠が自分のところへ来ると、身体の悪いところへその珠を当てると良くなると言われている。この日お参りした人にはおにぎりをお接待として渡す。	A
	128	29	お接待(お大師様) 旧3月21日 砂子寺	お大師さんの縁日。島内の寺(砂子寺)で行われる。朝8時前からお接待をする側の人たちが集まり、準備。お接待するものはそれぞれ個人が思い思いに準備する。買って来たパンやお菓子の人もあれば、作った蒸しパンなどを配る人もいる。また50円玉など硬貨を配る人もいる。8時半ころから寺にお参りに来た人たちがお参りの後お接待を受ける。昔は島内全域にお大師さんが88体配置されていて(島四国)、そのお大師さんをお参りしてからお接待を受けた。高齢化に伴い、お大師さんは島内の5ヶ所に集められた。たかす、ぬかば、あちまえ、大池、神社横の広場の東の5ヶ所。	B
	128	29	石鉈講 7月1日 竜宮神社・えびす神社	石鉈山を信仰する人達の講組織。平成20年代までは講員の人たちで石鉈山の大会に登拝していた。今は講自体は残っているが特に活動はしていない。宇佐八幡神社の境内に石鉈神社の分霊を祀った境内社がある。	D
	128	17	竜宮祭・えびす祭 7月30日 竜宮神社・えびす神社	島内の同じ場所に祀られている竜宮神社とえびす神社のお祭り。12時～14時、祭典を行う。	D

市町	地区	テーマ	行事名/行事日/場所/保存団体	概要	存続状態
松山市	128	8	宇佐八幡神社のお祭り 10月15日	高齢化で担ぎ手がいいため、神社から小さな車に乗せて神輿の棒を引っ張る形で島内を渡御する。以前は神輿2基を担いで賑やかに島内を回り、各所で「まわした～まわした～」という掛け声で神輿を担いで回して差し上げていた。祭り前日のおみどり神事は、数年前から行われていない。	B
	128	19	野忽那のお盆行事 8月7日～24日	家族が亡くなった家では提灯を新調し、お寺で8月7日から24日まで吊る。3年目にとぼしあげといってお盆行事終了後に焼く。13日には新仏のあった家の人たちが、14日は島全体で寺にて盆踊りをする。各家では先祖へ13日は茄子の牛、14日はおはぎ、15日は米と茄子を小さく切ったもの、そうめんを供える。15日の夜、海辺で麻がらを焚き、鉦を叩きながら念仏をあげる。そのあと笹または葦で作った船を海へ流す。昔は和船競争を行っており、地区を南北に3組に分けて競っていた。お盆前から各組で練習に明け暮れたという。	B
	128	28	巳午 12月の午の日	12月巳の日に準備。墓石に正月のものとは逆の左廻りの注連縄とお飾りをする。午の日に墓の場所に親戚が集まり、その日ついた餅を鎌を逆刃にして切り分け食べる。	B
	128	8	観音講	お寺(砂子寺)の寄付板に北観音講と南観音講からのものがある。島の北と南にそれぞれ観音講があった。島内各地に西国三十三観音の石仏が配置されていたが、現在はお大師さんと同じ島内5ヶ所とお寺に集められている。また新しく作られた三十三観音の石仏が皿山の登山道に配置されている。	D
	123・129	イ	株祭り 不定(年に1回開催) 祖霊神を祀っている場所や当番の家	先祖を同じくする者のみの祭りで、祖霊神を祀っている祠や石塔の前で神事を行った後、その年の当番にあった家等で、直会(懇親会的要素が強い)を行う。現在、睦月地区では、森本株の存在が確認されているが、かつては他に数株の株祭りが存在した。〔詳細調査報告16参照〕	B
	129	11	おみどり 秋の大祭の宵祭り 神社の拝殿	「おみどり」は、愛媛県下では、旧中島町の区域のみ伝わる神事で、各神社の秋の大祭の宵祭りに行われる。神社の拝殿の天井に、神社や鳥形に切り抜いた紙が貼り付けられた四方桁を吊るし、宮司が祝詞とともに、四方桁を上下させる。四方桁が下に降りてきた時に、参拝者が、四方桁に貼られた紙を引きちぎり、それを自宅に持ち帰る。中島地域の多くの地区では、それを畑に持っていき、竹に挟んで立て、豊作祈願や害虫よけのお守りとする人が多いが、睦月地区では、昔から集落全体を焼き尽くすような大火が何度もあった為か、家の天井裏などに置き、火除けや家内安全のお守りとする家もある。〔詳細調査報告25参照〕	B